高志の国
文学館
KOSHINOKUNI
Museum of Literature

高志の国文学館 紀要

第2号

平成28年度 高志の国文学館 紀要 第2号

目次

Ⅰ〔論文〕
古代礪波郡の墨書土器について　大川原竜一　4
Ⅱ〔研究ノート〕
宮本輝の随筆で取り上げられている素材について　菅田　智雄　26
Ⅲ〔企画展概要〕
（1）企画展「面白い箱！アニメづくりのスタジオの中へ」　大川原竜一　40
（2）企画展「浅野総一郎 ― 九転十起の生涯」　菅田　智雄　44
（3）企画展「知られざる 作家の世界　―書簡から直筆原稿、書画まで」　綿引　香織　48
（4）企画展　大伴家持生誕１３００年記念企画展
「官人　大伴家持―困難な時代を生きた良心」　大川原竜一　52

Ⅰ

〔論文〕

古代礪波郡の墨書土器について

大川原竜一

古代礪波郡の墨書土器について

大川原　竜一

はじめに

近年、日本古代史の分野においては、木簡や墨書土器、漆紙文書などの出土文字資料を利用した研究が活発におこなわれている。出土文字資料に注目が集まるのは、それが当時の情報を伝える貴重な一次史料であるためである。文献史料からは得ることができない新たな知見を提供する役割を果たしており、それらを研究することで古代社会の実態をより詳細かつ具体的に描くことが可能となる。

墨書土器とは、墨を用いて文字や記号、人面を含む画などを土器に記したもので、宮都や地方官衙、集落などの全国のさまざまな遺跡から出土する。墨書されたものの多くは、その意味内容が明確ではない。しかしながらそのなかでもわずかであるが、地名や人名、官職名、施設名などを記したものがあり、墨書土器はそれが出土した遺跡や遺構の性格を知ることができる資料であるとして分析されてきた。[1] 近年においては、土器に文字を記す行為の意味や、文字が記された土器の用途などが明らかにされ、[2] その後、墨書土器が用いられる場とその使用の意味を具体的に検討する必要があるという意見が呈されて、墨書土器の機能面についての研究が深められている。[3]

富山県内において出土した墨書土器の点数は近年、大幅に増加している。[4] 考古学からは、池野正男が墨書土器の出土した遺跡をその性格ごとに分類したうえで文字内容を検討しており、[5] 堀沢祐一が人面墨書土器と形代・斎串などの木製祭祀具との類型的な分析をおこなっている。[6] また、規則的に配置された大型の建物跡を有する官衙関連の遺跡の存在から墨書土器にアプローチした研究もある。[7] 文献史学の立場からは、鈴木景二が赤田Ⅰ遺跡出土の墨書土器をもとにその遺跡の性格を考察している。[8] このように墨書土器に関する研究の基盤は整いつつある。墨書土器一点一点のもつ情報量は多くなく、富山県内における出土点数は他県に比べるとけっして抜きん出ているわけではない。けれども出土した遺跡は県全体にわたっており、その記載内容を検討することによって、古代越中の地域社会の実態をより一層詳しく掘り下げることができるようになってきた。

本稿では、越中国四郡のうちの礪波郡を対象にして、当該地域より出土した墨書土器について現段階の成果を概観し、今後の課題を述べる。なお古代の越中国射水郡の墨書土器については、別稿においてすでに論じており、[9] あわせて参照いただければ幸甚である。

一　礪波郡家と墨書土器

現在の富山県は旧国の越中国一国にあたり、同国には射水郡・礪波郡・婦負郡・新川郡の四郡が属していた。

越中国を治めた国司の役所である越中国府は、古活字本の二十巻本系『和名類聚抄』によれば、射水郡に置かれていたとされる。[10] そしてそれは、現在の高岡市北部の伏木地区にある「古国府」や「古府」という地名をもとに、小矢部川の河口部左岸にある、二上山の東麓の伏木台地上に所在したと古くからみなされてきた。近年では、越中国庁推定地（勝興寺境内）および近傍の越中国分寺跡・国分尼寺跡を中心に、これらに関連する遺跡を「越中国府関連遺跡」とよんで調査が進められている。

射水郡の南に位置する礪波郡は、越中国四郡のなかで唯一海に面していない郡であり、現在の砺波市・小矢部市・南砺市および高岡市の一部（旧西礪波郡福岡町）にあたる。南砺市は、東礪波郡城端町・平村・上平村・利賀村・井波町・井口村・福野町と西礪波郡福光町が、平成十六年（二〇〇四）に合併して成立した市である。

礪波郡の役所である礪波郡家に関する記述は、古代の文献には残されておらず、礪波郡家と断定できる遺跡も今のところみつかっていない。郡家については、郡司が政務や儀式をおこなった中心施設である「郡庁」とその付属の官舎群、稲穀を収納保管した倉庫群である「正倉」、郡司もしくは来客者の宿舎とみられる「館」、そして郡の官人などへの食料供給に関わる施設の「厨

（家）」などから構成されていたことが知られている。[11] また全国各地の発掘事例を参照すると、現在郡庁とみなされている遺跡には大規模な建物跡が存在するものの、地域ごとにさまざまな形態をとり、その規模もまちまちで、時期により建物の配置や方位を変えるなど多様な展開をとげていることが分かる。[12] これは、国府の中心施設である「国庁」が斉一的で規則的な配置をとり、隣接する国どうしで酷似している事例があることと大きな違いを呈している。郡家内部の構成や施設のあり方は、各郡の事情にあわせて建物が整備されていたようである。

礪波郡家の存在を想起させる出土文字資料としては、小矢部市の日の宮・道林寺遺跡［小矢部市9］[13] でみつかった、「郡」と記した墨書土器が注目されている。[14] 本遺跡は市街地の南西部に位置し、倶利伽羅峠の麓にあり、小矢部川にそそぐ渋江川と市西部の砺波山丘陵とに挟まれた段丘上に立地する。古墳時代中期の集落跡が検出されている遺跡であり、「郡」墨書土器は、縄文時代から古代の遺物が出土した包含層からみつかっている。本遺跡においては、緑釉陶器などの遺物が出土しているものの、郡家と断定できる古代の遺構が確認されておらず、「郡」墨書土器と礪波郡家との関連は定かでない。ただしその周辺には、北に北反畝遺跡［小矢部市3］、西隣接地に松永遺跡［小矢部市12］、南には平田・藤森遺跡［小矢部市11］、施設名を表すとみなされている「飯室」墨書土器が出土した棚田遺跡［小矢部市7］などがあり、古代の遺跡が多く発掘されている。

また、日の宮・道林寺遺跡の北方約一・五キロメートルの渋江川左岸には埴生南遺跡［小矢部市8］が所在している。ここからは七世紀末から八世紀前半の掘立柱建物跡や溝跡が検出され、その溝跡からは人面墨書土器や斎串、土馬、土鈴などが出土している。斎串・人形などの木製祭祀具や人面墨書土器は、罪や穢れを祓う祭祀に使用されたと考えられている。近年、出土遺物と遺跡の性格との関係について、県内の人面墨書土器や木製祭祀具の組み合わせをもとにした考察がなされており、それらが出土する遺跡のほとんどは官衙関連や官衙に附属する祭祀場であった可能性が指摘されている。また、そのような祭祀場は国界や郡界を意識して選定されていたとも論じられている。[15] このような出土の傾向を示す県内の遺跡としては、古代の婦負郡に位置する南太閤山Ⅰ遺跡（射水市）や、新川郡の豊田大塚遺跡（富山市）があげられ、越中国内の郡界を考えるうえでも改めて検討する必要がある。

礪波郡家のもう一つの候補地としてあげられている遺跡は、石名田木舟遺跡［小矢部市1］である。[16] 本遺跡は、小矢部市と高岡市福岡町にまたがる遺跡であり、小矢部川と庄川によって形成された氾濫原に位置し、七世紀後半から九世紀代にかけての古代の遺構が確認されている。遺跡中央部においては、多数の掘立柱建物跡や、倉庫とみられる総柱建物跡が検出されている。遺物は施釉陶器や円面硯、製塩土器、土錘のほかに、「河王」「善文」「□麻呂」などの墨書土器が、さらに、掘立柱建物群の南側の溝跡から八世紀前半の「厨」墨書土器が出土している。また、遺跡中央部の北側に隣接する地区からは、竪穴建物跡と井戸跡が検出され、七世紀後半から九世紀前半の遺物がみつかっている。なかでも奈良三彩や水瓶、鉄鉢型土器、香炉、阿弥陀三尊像、瓦塔が出土していることから、仏教に関わる施設が存在した可能性もうかがえる。

ところで、「厨」という文字を記した墨書土器は、宮都や地方官衙の遺跡において多くみつかっている。富山県内では、本遺跡のほかに、越中国府関連遺跡に含まれる高岡市の美野下遺跡より、伝制（伝馬制）に関わるとみられる「傳厨」墨書土器が出土している。[17] 先にふれたように、古代において給食に関わる施設は厨（家）とよばれており、そこでは厨房および食膳具・食料の調達管理や出納をおこなっていたことが知られる。郡家の厨（家）は「酒屋」「備屋」「竈屋」「納屋」などという数棟の建物からなり、舘に付随することもあった。「厨」墨書土器は、厨（家）がつかさどる給食職務、そして給食対象者と深く関わりをもちながら、厨（家）で保管される食膳具がさまざまな供給の場に移動したものと考えられている。[18] ゆえに「厨」墨書土器の出土は、厨房および食膳具・食料の調達管理や出納などの機能を有する給食施設が周辺に存在した可能性を示唆する。しかしながら石名田木舟遺跡における建物跡は、側柱建物跡が三×二間、総柱建物跡が二×二間を主体する規模にすぎず、全国各地でみつかっている郡家遺跡のような大規模なものは検出されていない。「厨」墨書土器は、遺跡の性格判定における一指標となりうるが、それの出土のみを根拠にして、その遺跡や遺構が官衙に関わるもの

と即断できないことはすでに指摘されている。[19]伴出している他の遺物を含め、遺構のあり方も考慮して慎重に判断する必要がある。

このように、礪波郡家であると確定できる遺跡はみつかっていない。日の宮・道林寺遺跡の「郡」墨書土器や石名田木舟遺跡の「厨」墨書土器が礪波郡家と結びつくのか否かは、今後の発掘・調査の進展に負うところが大きい。

二　礪波郡内の交通関連施設と墨書土器

古代の礪波郡内における交通関連の施設としては、駅家があげられる。古代国家は全国を五畿七道に区分し、都と地方を結ぶ官道である駅路を敷設した。その路線上には、早馬の乗り継ぎや食料の供給を目的とした駅家とよばれる施設を、原則として三十里（約一六キロメートル）ごとに置いた。そして、大路（山陽道）の駅家には各二十匹、中路（東海道と東山道）には各十匹、小路であるその他の七道には各五匹の駅馬が用意されていた。

北陸道に属する越中国にも駅路が通過していた。十世紀後半に施行された『延喜式』兵部省・諸国駅伝馬条によると、当国には坂本・川人（流布本では川合）・日理・白城・磐瀬・水橋・布勢・佐味の八駅が設けられていたことが知られる。ただしこれらは平安時代の段階におけるものである。近年の全国各地の発掘や古代道路研究の成果によれば、奈良時代末期から平安時代初期にかけて全国的に駅路の改変があったこと、駅路は概ね九世紀代以降に道路幅が六メートルに縮小されることが判明している。また越中国に関しては、能登国の併合・分立があったことから、[20]『延喜式』に規定された駅路および駅家が奈良時代においても同様に存在していたかは改めて検討する余地がある。[21]ひとまず本稿では、古代交通研究会編『日本古代道路事典』（八木書店、二〇〇四年）および木下良『事典　日本古代の道と駅』（吉川弘文館、二〇〇九年）に準拠して、『延喜式』に記される越中国の駅家と推測されている遺跡および出土の墨書土器について確認していく。

越中国内の駅路のルートについて、越前国（のち加賀国）との国境から越中国府にいたる西半分に関しては、これまでいくつかの説が提示されてきた。[22]かつては、石川県金沢市中心部から二俣町を経て富山に入る近世のルートをあてはめる見解もあった。[23]けれども近年は、富山県と石川県の県境の砺波山（倶利伽羅峠）において幅約五～七メートルの古代道路の痕跡がみつかったことから、[24]石川県河北郡津幡町から倶利伽羅峠を通って富山県小矢部市の南西部へと抜け、[25]そこから県の西端を斜行する西山丘陵の麓と小矢部川左岸との間を北上して、伏木台地上の越中国府にいたったものと推定されている。この間、礪波郡にあった坂本駅家から川人駅家を経て、射水郡の日理駅家へと達していたとみられる。[26]

越中国第一駅の坂本駅家は、倶利伽羅峠を下った小矢部市南西部に推定されている。[27]当該地域では、南西から北東に向けて直線的に延びる古道の痕跡が確認されたほか、[28]先述した日の宮・道林寺遺跡を含む古代の遺跡が多数みつかっている。さらに、その北東に位置する小矢部市の桜町遺跡においては、平行する二本の溝と、路面に関わると推定される波板状の遺構をもつ幅約四・五～五メートル（溝の心々間距離五・五～六メートル）の道路状遺構が検出された（遺跡の概要については第四節にて述べる）。その時期については、奈良時代中期以降に作られたものと調査されている。[29]このように礪波郡と射水郡をつなぐ間のルートは西山丘陵と小矢部川に挟まれた平野部に復元できるが、坂本駅家とみられる明確な遺跡・遺構や文字資料はみつかっていない。

なお余談であるが、つぎの『万葉集』の歌の題詞にみえる「礪波の関」も、倶利伽羅峠の麓に所在したと想定されている。[30]

天平感宝の元年五月五日に、東大寺の占墾地使の僧平栄等を饗す。
時に、守大伴宿禰家持の、酒を僧に送れる歌一首
焼太刀を礪波の関に明日よりは守部遣り添へ君を留めむ
（巻第十八・四〇八五）

これは、大伴家持が越中国へ来赴してきた東大寺の僧平栄らを饗応した際に詠んだ歌である。しかし「礪波の関」と断定できる遺跡や遺構は確認されていない。歌が詠まれた八世紀代にはすでに廃絶していたとする学説もあるように、[31]それ自体の存在についても詳細はよく分かっていないのが現状である。

越中国の第二駅となる川人駅家の推定地としては、高岡市の麻生谷遺跡［高岡市・参考1］が注目されている。本遺跡は、市北西部を流れる小矢部川下

流の左岸に位置する、西山丘陵の麓にひろがる古墳時代から中世にわたる複合遺跡である。古代の遺構としては、八世紀後半から九世紀代の建物跡が検出されている。七×二間の東西棟の掘立柱建物跡と方位を同じくする桁行き四間以上の総柱建物跡および柵跡のほかに、木組みの井戸跡を囲むような掘立柱建物跡群が確認されているのである。遺物は、施釉陶器や土錘、斎串、「急々如律令」木簡などが出土したほか、井戸跡から「人長」と記された墨書土器がみつかっている。この「人長」の意味は「川人駅長」の略と解されることから、本遺跡は川人駅家と関連するとみなされている。麻生谷遺跡の西方約五〇〇メートルの地点は、合併以前における高岡市と西礪波郡福岡町との市町境にあたる。この付近の山麓には、『延喜式』神名帳に記載され、近世にはご神体が「川人明神」ともよばれた礪波郡の浅井神社（現高岡市福岡町赤丸）が所在していることから、礪波郡と射水郡の郡境がこの周辺にあったものと推測されている。また、本遺跡の西側に隣接する麻生谷新生園遺跡では、奈良時代の幅六・五メートルの道路跡と、平安時代前期の幅四・五メートルの石敷きの道路跡が確認されており、現在これらの遺跡が駅家に関わるとみられているが、その存在を明確に示す文字資料はみつかっていない。

その他、交通関連施設と目されている遺跡としては、高岡市に所在する遺跡であるが、中保B遺跡［高岡市・参考2］があげられる。

市南西部に所在する中保B遺跡は、古代礪波郡と射水郡との境界推定ラインの付近に位置し、海岸線から直線距離で一二キロメートルほど内陸にある。縄文時代から近世にいたるまでの複合遺跡であり、古代の遺構としては、掘立柱建物跡や井戸跡、道路跡、水路跡、埠頭遺構などが検出されており、掘立柱建物跡は、調査地内の東側と北側の二箇所に分けられて造営されている。これら建物群に沿うように、河川を一部掘削・加工した水路が流れており、その中央部と西部にはそれぞれ埠頭遺構がみつかっている。この水路は遺跡の東側を北流する祖父川につながるとみられる。祖父川は、遺跡から北へ約四キロメートルにある高岡市西部の長江地区の付近で小矢部川にあわさり、国府と比定される高岡市伏木地区で日本海に注いでいる。

調査地内の東側の建物群では、総柱を含む最大二五棟の掘立柱建物跡が確認されている。八世紀中頃から整然と計画的に配置された様相をみせ、概ね九世紀中頃までには活動を停止したとみなされている。建物群の西に水路中央部の埠頭遺構が造営されていることから、この東側の建物群は船着場に属する収蔵施設であったと理解される。その周辺からは、暗文土器や施釉陶器、木簡、転用硯、木製祭祀具などのほか、「案調」「案鳥」「津三」「林家」「秋麻呂」と記された墨書土器が出土した。最も多くみつかった「案調」「案鳥」墨書土器は、文書担当の下級役人である「案主」をさすとみなされているが、不明である。古代の港湾施設に関する用語としては、津や済、泊、湊などがみられるが、北陸地方では「津」墨書土器が多数出土しており、[32]本遺跡の「津三」墨書土器も、埠頭遺構やその周辺に位置する建物群とあわせて、北陸地方の河川交通や船着場の様態を考えるうえで重要な意味をもつ。

北側の建物群においては総計二七棟の掘立柱建物跡がみつかっている。八世紀中頃からは小規模な建物のみで構成されていたが、東側の建物群が活動を停止した九世紀中頃から、六×二間で西廂をもつ建物などが水路に直行して造営・整備されるようになる。この建物群と、径一五メートルほどの水路西部の埠頭遺構をつなぐような、両側に側溝のある心々間約三メートルの幅の道路跡が検出されており、船着場から建物群への物資の輸納や人の往来があったものと想定できる。北側の建物群の周辺の遺構からは、九世紀中頃以降の遺物が多く出土しており、施釉陶器や石帯（巡方）、銅製帯金具（巡方）、転用硯、木製祭祀具のほか、「大家」「罡家」や、人名を示す「岐佐女」「諸人」「秋刀自女」などの文字をもつ墨書土器が確認されている。

本遺跡の性格については、礪波郡と連絡する、物流に関わる「津」的な官衙施設であったとする見解がある。[33]これに対して、全国の発掘事例と比べて、その規模と建物配置から豪族層や有力者層が関与する私的要素の強い施設とみなす考えもある。[34]

古代の津には、国や郡が管轄するものから在地の有力者が経営するもの、荘園内に設置されたものまで、多様な造営主体と性格を有する施設があったと考えられる。古代の水上交通、とくに内陸部における河川交通についての文献史料は少なく、考古学や地理学との協業が欠かせない。近年、発掘調査により運河状の溝や埠頭と考えられる遺構が全国で発見され、陸上交通との接続や官衙との関連などが論じられるようになった。[35]古代越中国の交通およ

びその関連施設についての今後の研究には、駅家は日本海の海上交通およびそれと結びつく河川交通と関連して設定されていたという指摘がすでにあるように、[36]駅路などの陸路も含めて、陸上交通と河川交通、河川交通と海上交通、海上交通と陸上交通という国内の交通体系をもとに、遺跡や出土文字資料を位置づけて検討することが求められる。

三　礪波郡内の荘園と墨書土器

富山県内の墨書土器に関する研究は、昭和四十八年（一九七二）に、南砺市（旧東礪波郡井波町）の高瀬遺跡と、下新川郡入善町のじょうべのま遺跡において出土したことにより本格的にはじまった。両遺跡は古代荘園に関わる遺跡とみなされて注目された。

古代の越中国には、中央の貴族や有力寺院の荘園が数多く設置されていた。[37]天平十五年（七四三）に布告された墾田永年私財法は、中央の貴族や寺院のみならず地方の豪族をも刺激し、大規模な墾田開発や田地の売買・貸借が盛んにおこなわれることになった。さらに大伴家持が越中守在任中であった天平勝宝元年（七四九）閏五月に、朝廷は東大寺・大安寺・薬師寺・興福寺などの大寺院に対し、開墾された田地一百町をそれぞれ施入し、七月には、東大寺に四千町という、膨大な面積の墾田開発の権利をあたえた。東大寺はこれにより大々的に田地の開墾・集積につとめ、その多くは、越前・越中といった北陸道の諸国に設けられたことが知られる。

礪波郡においては、八世紀後半に東大寺の荘園として井山荘・伊加留岐荘・石粟荘・杵名蛭荘が存在したことが文献史料により確認されている。これらの設定に大伴家持が関わっていたことは、先述した『万葉集』巻第十八・四〇八五番歌の題詞から知られる。また、大伴家持が国内の墾田地の検察に赴いた際に詠んだ、つぎの歌が残っている。

墾田の地を検察する事に縁りて、礪波郡の主帳多治比部北里の家に宿る。時に、忽ちに風雨起こりて、辞去するを得ずして作れる歌一首

荊波の里に宿借り春雨に隠り障むと妹に告げつや

（巻第十八・四一三八）

この墾田地は、東大寺のものであるとも、[38]家持自身の所領であるともいわれているが、[39]検察そのものは墾田の占定あるいは開墾に関わるものであったと思われる。中央の貴族や寺院の荘園の設定や開墾には、現地にいる国司が携わったであろうことが推測される。

礪波郡の東大寺領荘園は、開田地図の記載や地理的条件の分析により、砺波平野の東端にあたる、庄川の上流域に所在したと推定されている。[40]

それらの荘園に関わる遺跡としては、先述した高瀬遺跡［南砺市7］があげられる。高瀬遺跡は南砺市の東南部に位置し、庄川が砺波平野に流れ込む扇頂部の西方約四キロメートルの地点にある。現在までに石仏地区と穴田地区の二箇所において墨書土器が出土している。なお本遺跡より北に約五〇〇メートルの場所には、越中国一宮の高瀬神社がある。

石仏地区からは、九世紀代の大型の建物跡と、その建物群を囲むようにして大きく蛇行する幅三メートルの旧河道が検出されている。主屋に相当するとみられる五×二間の身舎に東西に廂をもつ掘立柱建物跡と、その脇屋とみられる五×二間で南北両面廂付きの東西棟の掘立柱建物跡、また、桁行き六間以上の東西棟の掘立柱建物跡がみつかっており、主屋を中軸にして全体で西向きにコの字型を構え、その中央に広場のような空間が設けられていることが確認されている。遺物は、斎串のほか、鉄鉢型土器や浄瓶、瓦塔片などの仏教に関わる遺物が出土している。墨書土器は釈文が明確になっていない［□□□□（凡万呂ないし宅ヵ）］のみが報告されており、現在のところ遺物のなかに荘園との具体的な関わりを示す文字資料はみられない。ただし「昔右支□易曹上人□難」と書かれた木簡と転用硯がみつかっており、当該地区において筆録業務がおこなわれていたことは想定できる。

これに対して穴田地区では、四×二間と三×二間の規模の掘立柱建物跡が検出されている。その周辺からは、和同開珎・神功開宝・隆平永宝の銅銭や転用硯、「家成」「衣□□（万呂ヵ）」「南□□（万呂ヵ）」「□丸」などの人名と示唆される墨書土器が出土している。この地区の特徴は、概して小規模な建物で構成されており、また、出土遺物には炭化物や土器片が目立つなど生活面での痕跡がみられることであり、この点から当該地区は小集落の性格を

帯びていると指摘されている。[41]

このように高瀬遺跡は、石仏地区の大型建物跡が規則的に配置されていることや、石仏地区と穴田地区が同時期に活動していたとみられる点から、荘園の農業経営の拠点である「庄所（荘所）」[42]とそれを管理・運営した有力者の集落とみなされて、近辺に比定される東大寺領杵名蛭荘との関係が注目されてきた。他方、本遺跡の北西約一キロメートルの地点には「勧学院」という地名が遺っていることから、『延喜式』大学寮・諸国田条にみえる「越中国礪波郡墾田地」の勧学田、あるいは「越中国官倉納穀交替記」という史料に九世紀初頭から中頃にかけて礪波郡司として名をみせる中臣氏との関係を想定する説もあり、いまだ定見は得られていない。[43]しかしながら、本遺跡の近隣に所在する高瀬公民館の裏からは「三宅女」と解せる墨書土器が表採されたという報告があり、[44]「三宅」の語には荘園の意味が含まれることから、[45]本遺跡の範囲はさらにひろがるものと思われ、その性格は古代の荘園関連の遺跡である可能性を否定できない。

全国の発掘調査の事例によると、古代の荘園に関わる遺跡は、規則的な建物配置をなし、墨書土器や木簡などの文字資料および硯、祭祀具が出土するなど、遺構や出土遺物が地方官衙と類似する点のあることが分かってきている。とくに北陸地方では、八世紀後半以降の遺跡から「庄」と書かれた墨書土器がみつかることが多く、これらは庄所を指示すると解されている。[46]東大寺領荘園の越中国の開田地図においては、下記のように、「庄所」や「三宅所」などの施設の名がみられる。

史料名	成立年代	施設名
越中国新川郡丈部開田地図	天平宝字三年（七五九）	庄所、（味当村古郡所）
越中国射水郡鳴戸開田地図	天平宝字三年（七五九）	三宅（所）
越中国礪波郡杵名蛭村墾田地図	神護景雲元年（七六七）	三宅所
越中国射水郡鳴戸村墾田地図	神護景雲元年（七六七）	三宅所、川所
越中国射水郡鹿田村墾田地図	神護景雲元年（七六七）	三宅所、溝所[47]
越中国新川郡大荆村墾田地図	神護景雲元年（七六七）	庄所

富山県内では、高岡市の東木津遺跡から「庄」墨書土器、射水市の北高木遺跡から「庄」「西庄」「富／佐見御庄」墨書土器、富山市の任海宮田遺跡から「庄」墨書土器、中富居遺跡から「庄ヵ」墨書土器、そして入善町のじょうべのま遺跡から「西庄」墨書土器が出土している。

とくに北高木遺跡については、北東で隣接する荒畑遺跡と一体のものとしてとらえると、北高木遺跡を主体部として出挙や米の分配などの農業経営がおこなわれていたことがうかがえ、荘園関連の遺跡として位置づけられる。[48]またじょうべのま遺跡には、いくつかの建物跡の変遷が見受けられるが、いずれの時期も中庭風の広場を囲むように建物跡が配されており、コの字型の配置をなしていることが知られる。この遺跡からは、施釉陶器や風字硯、転用硯、「西庄」「□寺」「少黒万」「□（屯ないし宅ヵ）」などの墨書土器、また「丈部吉椎丸上白米五斗」という米の貢進について記された木簡が出土している。本遺跡の性格をめぐっては多くの見解が提示されているが、[49]「西庄」とよばれた荘園の庄所であり、生産物の収取・京進の機能を備えていた様相を看取することができる。

このように荘園に関連するとみられる遺跡の発掘調査が進められてきたが、その成果と文献史料にみえる荘園とを直接的に結びつけることは難しい。今後の発掘調査により、富山県内のみならず全国各地での荘園関連遺跡の類例が増えることで、礪波郡内に存した荘園と当該地域から出土した文字資料との関係性が明らかになることを期待したい。

四　桜町遺跡出土の墨書土器

桜町遺跡［小矢部市5］は、その北側を流れる子撫川が小矢部川と合流する地点のほど近くに所在し、小矢部川左岸の段丘上に位置する。縄文時代から近世までの長期にわたって営まれた遺跡であり、縄文時代の高床建物の巨木柱根や水場木組みが発見された遺跡として全国的に有名である。

古代の遺構は、遺跡の北端のほぼ中央部にあたる産田地区と、その東側に位置する中出地区を中心に、飛鳥時代から平安時代にかけての竪穴建物跡や総柱を含む掘立柱建物跡が一〇〇棟近くみつかっている。さらに産田地区においては、先述したように、両側に側溝をもつ道路跡が検出されており、平安時代の北陸道の駅路と推測されている。本遺跡は、陸上交通と河川交通の

要に立地していたことがうかがえるが、大型の建物跡がみられないため倉庫群が設置された集落跡と考えられている。

注目される出土遺物は、産田地区から、奈良時代の円面硯や土錘、和同開珎、漆付着土器、墨書土器「息」「真茂」「和」「田志」などが、また平安時代の製塩土器や土馬が発掘されている。中出地区においては、奈良時代の遺物として、漆付着土器や灯明皿、墨書土器「吉足」「古」「衣女」「小長」が出土している。さらに同地区を流れる平安時代前期の溝ＳＤ一一およびその周辺からは、九世紀中頃の土器のほか、円面硯や坏蓋硯、漆付着土器、灯明皿、木簡「一石一石」、斎串、銅製帯金具（鉸具、巡方）、鉄製帯金具（鉈尾）、「長罡」「長罡神祝」「大祝」「祢宜」「真茂」「小継」「衣女」などの墨書土器がみつかっている。墨書土器に記される「長罡」（罡は岡の異体字）は、『和名類聚抄』に載る礪波郡長岡郷に関連すると推測され、「長罡神祝」「祢宜」「大社祝」「大祝」「祝」の文字は『延喜式』神名帳に記された長岡神社の神職に関わるとみられる。桜町遺跡から出土した神職名を記す墨書土器は、古代の神社史や地域社会の研究に重要な知見を呈している。

神職名を記した文字資料は全国各地の遺跡で確認されており、[50]それら遺跡のもつ建物跡の建築様式や施設構造上の特徴などの共通性の有無が検討されている。しかしながら発掘された遺跡・遺構が神社跡であるかどうかを確定するための判断基準が確立しているわけではない。本遺跡においては、掘立柱建物跡を多数検出した産田地区から南に一〇〇メートルほど離れた場所に単独で存在する、柵と溝によって区画された二×二間の総柱建物跡が祭祀に関わる遺構である可能性が指摘されている。[51]けれども当該の遺構は、周辺の柵跡の上端に焼損炭化の痕跡があることから、奈良時代末期までには焼失・廃絶したとみられており、上記の神職に関わる墨書土器が平安時代前期の溝跡などから出土していることとの関係は明確になっていない。

神職名を記す墨書土器が出土した溝ＳＤ一一は、遺跡の西にある丘陵の谷間から引水されており、北西から南東へ流れる。幅は約二～三メートル、深さは約三〇センチメートルであるが、途中で幅七メートルとひろくなっているところがある。そこでは東岸寄りを中心に溝のなかに流路に沿って杭が打ちこまれており、分水のための堰の役割が確認されている。また、西岸にある掘立柱建物跡を避けるようにその手前でＬ字状に屈曲していることから、人工的に掘削された、水を供給する灌漑用水路と考えられており、中出地区より南側の水路下流には水田がひろがっていたとみられている。ゆえに報告書では、上記の墨書土器が水に関わる豊作を祈る祭祀をおこなう際にもちこまれた可能性が示唆されている。ただし溝の覆土には、古墳・飛鳥・奈良時代の土器もかなり多く含まれており、平安時代前期の人々が他所から集めたものを投げ込んだ可能性も想定されている。いずれにしても溝ＳＤ一一は水田に水を供給するために人工的に掘削された灌漑用水路であり、神職名を記す墨書土器がそれとどのような関わりをもつのかという点は検討の余地がある。

ところで近年、古代の神社の立地については、田地開発や経営において水利上のきわめて重要な地点にあることが、越中国の東大寺領開田地図の分析をもとに指摘されている。[52]

越中国の東大寺領開田地図のうち神社に関わる記載がみられるのは、礪波郡の井山荘・石粟荘・杵名蛭荘、射水郡の須加荘・榎田荘・鹿田荘である。また神護景雲元年（七六七）の「越中国新川郡大荆村墾田地図」には、荘園の北辺を蛇行している辛女川の北岸の荘域外に「鹿墓社」という神社の名が記されている。天平宝字三年（七五九）の「越中国新川郡丈部開田地図」には、荘域外に設定された「庄所三町」のなかに「味当村古郡所」が存在し、「味当社」という村落名を冠する神社の名がみえる。

天平宝字三年の「越中国射水郡須加開田地図」には、荘園内の中央の七条世岐里二行三の坪に墨で丸く囲まれた「社」という記載がみられ、その西隣に、須加山から二本の水路が南下して一本に合流する水路が描かれている。このような水路の開削・維持が田地開発や経営に重要な役割を占めたことが知られている。[53]くわえて神護景雲元年の「越中国射水郡須加村墾田地図」には、七条世伎里二行二（三の誤記）の坪に「神田□（井社所）□□八十歩」、同四に「神□□段（田壱）」の記載がみえる。[54]ここにおいては「社」の西隣を南流していた水路はみられなくなるが、荘園の西側から流れ込む「伊加多祢川」とそれに交わる大溝が新たにうかがえ、この大溝は「神田□□□（井社所）八十歩」と「神□□段（田壱）」の間を流れていることが分かる。このことから松尾充晶は、天平宝字段階の

「社」が神護景雲段階には「神田□□□（并社所）八十歩」として継承されたとみて、「社所」とは「社」を継承した社殿を伴って設置された神社であると解釈し、「社」「社所」ともに湧水地や水路など水利上の有意な地点に存することを指摘している。

「社」や「社所」の立地に関する指摘は基本的に首肯できる。ただし東大寺に提出された越中国東大寺領の野地の開墾状況の報告書である天平宝字三年十一月十四日付の「東大寺領越中国諸郡庄園総券」（「越中国諸郡庄園惣券第一」）[55]には、各坪の記載はあるが、「社」については見受けられない。一方で、礪波・射水・新川郡にあった東大寺の未開田地の検校を命じた天平神護三年（七六七）五月七日付の「越中国司解」[56]には見開地の項目に「神分壱段」、また東大寺に墾田の状況を報告した神護景雲元年十一月十六日付の「越中国司解」（「越中国諸郡庄園惣券第三」）[57]には「奉神壱段捌拾歩」と記載されているのである。すなわち須加荘においては、天平宝字三年段階には「社」がその荘園内に存在はしていたものの東大寺による荘園経営の構成に組み込まれておらず、天平神護三年までの間に荘園開発の展開にともなって、「神分」としての「神□□（田壱）段」がまず設けられ、そして神護景雲元年十一月十六日までに、新たに「奉神」分として「神田□□□（并社所）八十歩」が水路に接して設置されたものと推定できる。つまり「神□□（田壱）段」と「神田□□□（并社所）八十歩」はともに、荘園経営による収穫を奉神分として東大寺が設置したものと考えられる。ゆえに神社を示す「社」と「社所」の実体は異なり、前者が後者へと継承されたとは断定できないのである。この点については、井山荘の事例が参考になる。

井山荘は天平神護三年に礪波郡の豪族であった越中国員外介利波臣志留志が東大寺に献じた墾田一百町に由来する荘園である。ここにおいては、神護景雲元年「越中国礪波郡井山村墾田地図」の廿六条井山里五行一のうちに「社所一段、土神分一段、荆波神分四段、雄神分四段」の合計一町の田地がみえ、また天平神護三年の「越中国司解」には見開地の項目に「神分壱町」と記載されており、前者が後者の内訳にあたる。「荆波神」と「雄神」はそれぞれ『延喜式』神名帳にみえる礪波郡の荆波神社と雄神神社であるとみなされ、また「土神」は式内社に列せられない在地の小社であると解されており、東大寺が荘園の開発・経営との関わりにおいて在地の神社への神田を設定し、労働力の確保や編成にあたったことが明らかにされている。[58]「社所」については、その実態を示す史料は管見にないが、「一段」と付記されていることから土地が付属しており、また「所」は施設や機構を表すため、同坪内に存する上記の神田の管理施設であったと考えられる。すなわち水利上の重要な地点に立地したのは、神社に限らず、荘園の開発や経営における神田の管理施設であった「社所」も同様であったとみなされるのである。

ここにおいて桜町遺跡における遺物の出土状況を鑑みると、神職名を記す墨書土器の点数は、溝ＳＤ一一から出土した土器全体のごく一部にすぎない。また墨書土器は坏（高台付坏）・椀・蓋という主として食膳具に限定されており、一般的に祭祀行為に用いられたものとみなされている人面墨書土器、および人面墨書土器の多数を占める甕はみつかっていない。さらに記銘の部位はほとんどが坏（高台付坏）の底部外面および蓋の天井部内面であることに特徴がある。もし神職名を記す墨書土器が食膳具であったと考えるならば、[59]その墨書は飲食時において使用者からみて隠れてしまう位置にされていることになる。すなわちこれらの点は、土器を裏返した際に標識されることを意図したものと推測され、土器全体のなかから目的のものを特定しやすくするところに墨書の機能があったのである。具体的には、食事の供給元における保管、または運搬などに際して特定の人物が使用するものを識別するためであったと想定できる。溝ＳＤ一一はその保管の役割を終えた後の廃棄場所であったために、土器が大量に出土したのではないだろうか。

以上の点については、越前国坂井郡にあった桑原荘の庄所の事例が注目される。史料によると、同荘は大伴宿禰麻呂が所有していた土地と屋三間を東大寺が買得して成立したもので、天平勝宝七歳（七五五）にはその庄所として屋五・倉一が整備されたことが知られる。[60]またそこには鋤二柄や手鋤二柄、鎌二柄、鍬二十柄、鉏十柄などの農具の他に、木佐良一百口や田坏二百口、田笥一百合がみえることから、相当な数の食膳具が備えられていたようであり、ここで食事の供給や饗宴がおこなわれていた可能性が推測される。越中国の東大寺領荘園の庄所（三宅所）に付属する土地は、せまい場合でも二段（天平宝字三年「越中国射水郡鳴戸開田地図」）、ひろい場合は三町（天平宝

字三年「越中国新川郡丈部開田地図」）におよぶのに比べると、[21]「社所」の敷地は、井山荘においては一段、須加荘においては神田とあわせて八十歩であり、けっしてひろくないが、田地開発や経営をするという機能を念頭におくと、その多寡はともかく食膳具を所蔵していたことは十分に考えられる。このことから、桜町遺跡における墨書土器およびその出土状況は田地開発・経営との関わりを否定するものでなく、本遺跡は長岡神社の「社所」に関わる遺跡であると位置づけられる。

おわりにかえて

本稿では、古代礪波郡の墨書土器をとりあげ、それらの出土した遺跡について概要をまとめた。

富山県内で出土した墨書土器は全国の傾向と同じく、その記載のほとんどは一文字や記号が多く、木簡や漆紙文書と比較すると、明確に意味の分かる内容が記されていることは少ない。ただし地名や人名・職名・施設名などが判別できるものがあり、遺跡・遺構の性格を考える一助となる場合もある。

墨書土器は、その器物という性質上、長距離の移動は想定しにくく、遺跡や出土場所との関わりが強い。遺跡をとらえるうえで非常に有効な特性をもつ考古資料として注目される。墨書土器がどのような場所や状況で使用されていたのかを、その発掘場所や出土状況、伴出した他の遺物などとあわせて全体的に検討することで、遺跡の性格を明らかにすることが可能となる。

今後の発掘調査により富山県内の墨書土器の事例が増えることを期待しつつ擱筆する。

注

（1）大川清「墨書土器」（『新版考古学講座7　有史文化　下　遺物』雄山閣出版、一九七〇年）、斎藤忠「墨書土器研究の意義」・玉田時雄「墨書土器」（『季刊考古学』一八、雄山閣、一九八七年）、津野仁「地方官衙出土の墨書土器―所管名墨書土器からみた土器の供給・管理・消費をめぐって―」（『古代』八九、早稲田大学考古学会、一九九〇年）、山口英男「墨書土器と官衙遺跡」（藤沢市文書館運営委員会編『藤沢市史研究』二四、藤沢市文書館、一九九一年）など。

（2）高島英之『古代出土文字資料の研究』（東京堂出版、二〇〇〇年）、平川南『墨書土器の研究』（吉川弘文館、二〇〇〇年）。

（3）三上喜孝「墨書土器研究の新視点―文献史学の立場から―」（『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館、二〇一三年、初出二〇〇二年）。

（4）富山県内の墨書土器の集成は、拙稿「富山県出土の墨書・刻書土器」（『古代学研究所紀要』一四、明治大学古代学研究所、二〇一〇年）を参照のこと。高岡市・氷見市・射水市出土の墨書土器については、拙稿「古代射水郡の官衙関連遺跡と墨書土器」（『高岡市万葉歴史館紀要』二五、高岡市万葉歴史館、二〇一五年）において増補している。

（5）池野正男「施設墨書と建物」（『大境』三〇、富山考古学会、二〇一一年）。

（6）堀沢祐一「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」（『水野正好先生古稀記念論文集　続文化財学論集　第一分冊』文化財学論集刊行会、二〇〇三年）、同「越中国における律令祭祀具と墨書土器について」（『大境』二五、富山考古学会、二〇〇五年）、同「越中国から見た人面墨書土器」（『考古学と地域文化　一山典還暦記念論集』一山典還暦記念論集刊行会、二〇〇九年）、「古代越中国の人面墨書土器について」（『高岡市万葉歴史館紀要』二三、高岡市万葉歴史館、二〇一三年）。

（7）根津明義『古代越中の律令機構と荘園・交通』（岩田書院、二〇一五年）。

（8）鈴木景二「平安前期の草仮名墨書土器と地方文化―富山県赤田Ⅰ遺跡出土の草仮名墨書土器―」（『木簡研究』三一、木簡学会、二〇〇九年）、同「近年の出土仮名文字資料について」（『日本史研究』六三九、日本史研究会、二〇一五年）、同「出土資料に書かれた歌」（犬飼隆編『古代文学と隣接諸学4　古代の文字文化』竹林舎、二〇一七年）。

（9）拙稿注（4）前掲論文。

（10）大東急記念文庫本『和名類聚抄』の郡名下註には、国府は礪波郡にあると記され、また、三巻本『色葉字類抄』には、礪波郡に「国府」、射

水郡に「府」と注記している。このことから平安時代後期から中世前期にかけて、越中国府が一時移転した可能性を示唆する見解もある。木下良「大東急記念文庫本『和名類聚抄』と前田本・黒川本『色葉字類抄』に見る加賀国府と越中国府」（『北陸都市史学会報』四、北陸都市史学会、一九八二年）、同「古辞書類に見る国府所在郡について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇、国立歴史民俗博物館、一九八六年）。

（11）森公章「郡家の施設と部署」（『地方木簡と郡家の機構』同成社、二〇〇九年、初出二〇〇三年）、鐘江宏之「郡家と庄所」（佐藤信編『史跡で読む日本の歴史4　奈良の都と地方社会』吉川弘文館、二〇一〇年）など。

（12）条里制・古代都市研究会編『日本古代の郡衙遺跡』（雄山閣、二〇〇九年）、小宮俊久「郡衙」（江口桂編『考古調査ハンドブック11　古代官衙』ニューサイエンス社、二〇一四年）、国立文化財機構奈良文化財研究所編『第20回古代官衙・集落研究会報告書　郡庁域の空間構成』（クバプロ、二〇一七年）。

（13）以下、後掲の一覧表に載る遺跡については、その遺跡名の後ろに、所在する市名と遺跡の番号を［　］内に記す。なお本稿においては、紙幅の都合上、各遺跡の発掘報告書名については割愛した。詳細な遺跡の内容に関しては、それぞれの報告書を参照されたい。

（14）伊藤隆三「小矢部市内で発掘された古代道」（『古代交通研究』創刊号、古代交通研究会、一九九二年）、根津明義「古代越中における官衙的様相と在地社会―令制期における在地の適応と展開および諸施設の現地比定研究の現状―」（『古代越中の律令機構と荘園・交通』岩田書院、二〇一五年、初出二〇〇九年）。

（15）堀沢祐一「古代越中国の律令祭祀について」（『信濃』六〇―四、信濃史学会、二〇〇八年）、同「越中国の祭祀・仏教関係遺跡と遺物」（木本秀樹編『古代の越中』高志書院、二〇〇九年）。

（16）森隆「越中の古代居宅建物に関する覚書」（『大境』一九、富山考古学会、一九九八年）。

（17）川﨑晃「「傳厨」考」（『高岡市万葉歴史館紀要』九、高岡市万葉歴史館、一九九九年）。

（18）山中敏史「郡衙による食器管理と供給」（文化財研究所奈良文化財研究所編『古代官衙・集落と墨書土器―墨書土器の機能と性格をめぐって―』文化財研究所奈良文化財研究所、二〇〇三年）、文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編』（文化財研究所奈良文化財研究所、二〇〇四年）。

（19）平川南「「厨」墨書土器論」（『墨書土器の研究』前掲、初出一九九三年）、拙稿「霞ヶ関遺跡出土の「入厨」墨書土器について」（『論叢　古代武蔵国入間郡家―多角的視点からの考察―』古代の入間を考える会、二〇〇八年）。

（20）能登国は養老二年（七一八）に越前国より分立、天平十三年（七四一）に越中国へ併合、天平宝字元年（七五七）にふたたび分立した。『続日本紀』養老二年五月乙未（二日）条「割二越前国之羽咋・能登・鳳至・珠洲四郡一、始置二能登国一。」、『同』天平十三年十二月丙戌（十日）条「能登国并二越中国一。」、『同』天平宝字元年五月乙卯（八日）条「其能登・安房・和泉等国、依レ旧分立。」

（21）北陸道の駅路の主路が変遷した可能性については、金田章裕「加茂遺跡（石川県津幡町）深見村・深見駅」（『古代・中世遺跡と歴史地理学』吉川弘文館、二〇一一年、初出二〇〇七年）において指摘されている。また、郡家を拠点とする形で経営されていた伝路（伝馬路）との関係についても検討が必要である。米沢康「古代北陸道の伝馬制」（『北陸古代の政治と社会』法政大学出版局、一九八九年、初出一九七六年）、根津明義「県西部における古代交通研究について」（『大境』二〇・二一、富山考古学会、二〇〇〇年）。

（22）木下良「近世に至る北陸道の概観（2）古代」（富山県教育委員会編『富山県歴史の道調査報告書―北陸街道―』富山県郷土史会、一九八〇年）を参照のこと。木倉豊信は、奈良時代初期頃までは、石川県羽咋郡宝達志水町（旧志雄町）から富山県氷見市へ抜ける「之乎路（志雄路）」が北陸道の駅路の主路であったという考えを示している。木倉豊信「越中万葉余考（前）」（『越中史壇』四、越中史壇会、一九五五年）、同「越

中の古代・中世と交通」（『越中史壇』一〇、越中史壇会、一九五七年）。橋本芳雄は、むしろ「之乎路（志雄路）」が能登（越前）と越中国をむすぶ奈良時代の駅路であったと述べている。橋本芳雄「能登・越中交通史」（『越中史壇』一〇、越中史壇会、一九五七年）。

(23) 石崎直義「越中坂本古駅考」（『越中史壇』二九、越中史壇会、一九六四年）。なお石崎は、越中国第一駅の坂本駅家を南砺市（旧西礪波郡福光町）の坂本地区に比定している。

(24) 西井龍儀「倶利伽羅峠の古道」（『古代交通研究』七、古代交通研究会、一九九七年）。

(25) 『万葉集』巻第十八・四一三二番歌の越前掾大伴池主から越中守大伴家持への贈歌の序文に「駅使を迎ふる事に依りて、今月十五日、部下の加賀郡の境に到来る。面蔭に射水の郷を見、恋緒は深海の村に結ばゆ。」とみえる。すなわち池主が駅馬による使者を迎える用事で赴いた「加賀郡の境」が、家持のいる越中の「射水の郷」、つまりかつての赴任地をしのぶ「深海の村」であったと記されていることから、現在の津幡町にあったとされる「深海」（深見）が、越中国との境と認識されていたとみられる。増山安太郎「奈良時代の北陸街道―クリカラ越か志雄越か―」（『越中史壇』六、越中史壇会、一九五五年）、佐藤隆「越への道〈近江を含めて〉について」（高岡市万葉歴史館編『高岡市万葉歴史館論集9　道の万葉集』笠間書院、二〇〇六年）。北陸道の駅路は、その「深海」（深見）に所在した深見駅家から、越中国に向かう道と能登（国）へ北上する道とに分かれたとみられている。津幡町の北中条遺跡において「深見驛」墨書土器が出土していることから、倶利伽羅峠の西麓にある、津幡川の谷口の南側がその分岐点であったと考えられる。そこより能登方面へ約二キロメートル北上した津幡町の加茂遺跡においては、「□（郡カ）符深見村□（諸カ）郷驛長并諸刀禰等」と冒頭に記された平安時代前期の郡符、いわゆる「加賀郡牓示札」が出土している。また「加賀郡牓示札」の出土地点のすぐ東側には、古代北陸道の道路遺構がみつかっている。石川県埋蔵文化財センター編『発見！古代の触れ書き石川県加茂遺跡出土加賀郡牓示札』（大修館書店、二〇〇一年）、出越茂和「北陸道―加茂遺跡―」（舘野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報3　遺跡と技術』吉川弘文館、二〇一六年）。

(26) 根津明義「越中国」（古代交通研究会編『日本古代道路事典』八木書店、二〇〇四年）。なお木下良は、越中国第二駅の名は古写本にみえる川人駅家が正しいとする。木下良「古代道路研究の現況―「道路調査ハンドブック」特集に寄せて―」（『古代交通研究』一〇、古代交通研究会、二〇〇一年）。

(27) 小林健太郎「越中国」（藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅱ』大明堂、一九七八年）、木下注（22）前掲論文、伊藤注（14）前掲論文。

(28) 伊藤注（14）前掲論文。

(29) 道路状遺構の成立時期について、当初は七世紀後半の整備のあと、九世紀代にふたたび整備されたとみられていたが、下記の報告書において再考されている。小矢部市教育委員会編『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ　第1分冊』（小矢部市教育委員会、二〇〇三年）。

(30) 小矢部市石坂字関野が遺称地とされており、現在、その近隣の同市蓮沼の県道二七四号線沿いに石碑が建てられている。

(31) 米沢康「古代礪波関考」（『北陸古代の政治と社会』前掲、初出一九六七年）。

(32) 出越茂和「古代北陸の津湊と交通」（『日本海文化研究所公開講座平成22年度記録集　日本海を行き交う人・モノ・文化Ⅱ』富山市教育委員会、二〇一二年）。

(33) 根津明義「古代越中国・中保B遺跡における船着場遺構と内陸の水上交通」（『古代交通研究』八、古代交通研究会、一九九八年）、同「古代越中における物資輸送の一形態―主に内陸における船着場遺構への認識をめぐって―」（『古代越中の律令機構と荘園・交通』前掲、初出二〇〇五年）、同「古代越中における河川交通と歴史環境―在地系官衙的施設の出現とその歴史的背景―」（『古代越中の律令機構と荘園・交通』前掲、初出二〇〇六年）。

(34) 井上尚明「多様な地方官衙と庄家・居宅」（江口桂編『考古調査ハンド

ブック11　古代官衙』前掲）。

(35) 鈴木靖民・川尻秋生・鐘江宏之編『日本古代の運河と水上交通』（八木書店、二〇一五年）。

(36) 浅香年木「古代の「北陸道」と海運」（『古代地域史の研究　北陸の古代と中世1』法政大学出版局、一九七八年、初出一九七一年）、木下良「北陸道の国津と国府津」（『日本海学会誌』四、日本海学会、一九八〇年）、金坂清則「北陸道―その計画性および水運との結びつき―」（木下良編『古代を考える　古代道路』吉川弘文館、一九九六年）。

(37) 当地における貴族や中央官人層の荘園所有についてはいくつかの研究がある。米沢康「八世紀中葉における越中在地の政治的情勢」（『越中古代史の研究―律令国家展開過程における地方史研究の一齣―』越飛文化研究会、一九六五年）、藤井一二「律令田制と荘園の成立」（『初期荘園史の研究』塙書房、一九八六年）。

(38) 米沢康「東大寺領「越中庄園」をめぐって」（『北陸古代の政治と社会』前掲、初出一九六六・一九六八年）。

(39) 中村順昭「大伴家持と越前・越中の在地社会―家持の墾田をめぐって―」（『万葉古代学研究所年報』五、万葉古代学研究所、二〇〇七年）。

(40) 金田章裕・田島公「越中国砺波郡東大寺領荘園図　石粟村・伊加流伎（伊加留岐村）・井山村・杵名蛭村」（金田章裕・石上英一ほか編『日本古代荘園図』東京大学出版会、一九九六年）参照。

(41) 藤井一二「史跡・高瀬遺跡の史的性格―墨書土器・木簡をめぐって―」（『歴史地名通信』一八、平凡社地方資料センター、一九九三年）。

(42) 「庄所（荘所）」とは、荘園開発の促進とその経営の維持・管理、また、荘園からの生産物の収取・京進を担った施設であると考えられている。そこには、中央の命令系統に属して政務を担当しうる場、労働力編成をなすうえで必要な各種農具・生活用具等を保存する場、さらに収納物を貯蔵・管理する場が想定され、一定空間にそれぞれの機能を包摂した屋・倉などの建物群が構成されていたとみなされている。藤井一二「荘所の構造と機能」（『初期荘園史の研究』前掲、初出一九七八年）。

(43) 浅香年木「北陸の庄田について」（『古代を考える16　北陸庄園遺跡の検討』古代を考える会、一九七八年）。

(44) 山森伸正「高瀬公民館裏出土の墨書土器」（『富山考古学会連絡紙』一〇一、富山考古学会、一九八五年）。

(45) 「三宅所」については、越前国にあった桑原荘が「桑原三宅」とも呼称されている史料があることから、「庄所」と同義であると解せる。天平宝字元年十二月二十三日付「越前国使等解」（「東南院文書」第三櫃第十二巻第二紙『大日本古文書　家わけ第十八ノ二　東大寺文書之二（東南院文書之二）』五〇二号、一五七頁）。

(46) 小口雅史・吉田孝「律令国家と荘園」（網野善彦ほか編『講座日本荘園史2　荘園の成立と領有』吉川弘文館、一九九一年）、小西昌志「北陸荘園と墨書土器―横江庄の調査成果から―」（文化財研究所奈良文化財研究所編『古代官衙・集落と墨書土器―墨書土器の機能と性格をめぐって―』前掲）。

(47) 庄川扇状地の扇央部に位置する砺波市の久泉遺跡［砺波市6］において、幅六・九～一〇メートル、深さ一・一メートル～一・五五メートルの南西から北東へ延びる大溝跡がみつかっている。この大溝跡が東大寺領荘園石粟荘の比定地の一つである砺波市東保方面へ向かうことから、「越中国礪波郡石粟村官施入田地図」断簡に記載がある「大溝」や、石粟荘・伊加留岐荘・井山荘の三荘に関わる管理施設（「溝所」）と結びつける見解がある。金田章裕「久泉遺跡（砺波市）の大溝・建物遺構―古代東大寺領荘園との関連―」（『古代・中世遺跡と歴史地理学』前掲、初出二〇〇七年）、野原大輔「越中国砺波郡における荘園関連遺跡の調査―久泉遺跡の大溝と建物群について―」（『日本考古学』二九、日本考古学協会、二〇一〇年）。しかし大溝跡から出土した遺物には十二世紀後半から十四世紀前半までのものが含まれており、この大溝のすぐ西側に十三世紀前半の遺物を含む溝が並走することから、大溝の掘削時期はそれを遡らないとする批判もある。久々忠義「古代越中の農業技術」（木本秀樹編『古代の越中』前掲）。

(48) 拙稿注（4）前掲論文。

(49) 本郷真紹「越中国新川郡丈部開田地図」（金田章裕・石上英一ほか編『日

本古代荘園図』前掲）を参照のこと。なお東大寺領丈部荘に比定する説と、「西庄」墨書土器から西大寺領新川郡佐味荘に関連する遺跡とみる説がある。前者は、奥田新作「新川東部の諸荘園と「じょうべのま」」（『黒部川扇状地の歴史と風土』桂書房、一九八七年、初出一九七三年）、奥田新作・奥田淳爾「丈部村墾田地と西庄について」（『富山史壇』五九・六〇、越中史壇会、一九七五年。のち奥田新作『黒部川扇状地の歴史と風土』前掲に収録）、橋本正「じょうべのま遺跡の歴史と性格」（富山県教育委員会編『富山県入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要（3）』入善町教育委員会、一九七五年）、奥田淳爾「じょうべのま遺跡と東大寺領丈部荘」（『黒部奥山と扇状地の歴史』桂書房、二〇〇〇年）、吉岡康暢「北陸初期庄園遺跡の考古学的検討」（吉岡康暢編『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会、一九八三年）など。後者は、石原与作「東大寺領新川郡大藪庄と丈部庄（其の2）」（『富山県地学地理学研究論集』五、富山地学会、一九七一年）、同「丈部庄の所在地と、新川郡衙の移動について」（『富山史壇』六六、越中史壇会、一九七七年）、藤井一二「荘園絵図と荘園遺跡―考古学・文献史学の接合への試み―」（『月刊考古学ジャーナル』二四一、ニューサイエンス社、一九八五年）、同「国指定史跡〝じょうべのま遺跡〟と寺領荘園―墨書「西庄」と「丈部吉椎丸」木簡―」（日本海地域史研究会編『日本海地域史研究』八、文献出版、一九八八年）など。その他に、水陸両用の利便性を考慮した駅家の可能性を指摘する見解もある。森注（16）前掲論文。遺跡自体は臨海地帯に立地し、旧河道に面した二面廂の建物があることから、海上交通および河川交通を利用して物資の集散を機能とした施設であったと考えられている。中村太一「港津の構造―じょうべのま遺跡に関する一試論―」（『古代交通研究』六、古代交通研究会、一九九七年）。

(50) 上野章「古代の神祇職と神社の調査事例―小矢部市桜町遺跡出土長岡神社の墨書土器から―」（『大境』三五、富山考古学会、二〇一六年）。

(51) 常深尚「桜町遺跡の神祇信仰と長岡神社」（毛野考古学研究所富山支所編『小矢部市埋蔵文化財調査報告書　第77冊　富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書―店舗建設に伴う埋蔵文化財調査―』小矢部市教育委員会、二〇一五年）。

(52) 松尾充晶「古代神社の立地環境と構造」（島根県古代文化センター編『島根県古代文化センター研究論集　第16集　古代祭祀と地域社会』島根県教育委員会、二〇一六年）。

(53) 金田章裕「越中国射水郡東大寺領荘園図」（『古代荘園図と景観』東京大学出版会、一九九八年）。

(54) 吉川敏子「越中国射水郡東大寺領荘園図　須加（村）・鳴戸（村）・椹田・鹿田村」（金田章裕・石上英一ほか編『日本古代荘園図』前掲）

(55) 「東南院文書」第三櫃第二十八巻（『大日本古文書　家わけ第十八ノ二　東大寺文書之二（東南院文書之二）』五四一号、二九五～三一二頁）。

(56) 「東南院文書」第三櫃第三十巻（『大日本古文書　家わけ第十八ノ二　東大寺文書之二（東南院文書之二）』五四三号、三一一～三二五頁）。天平神護三年八月十六日に、神護景雲に改元（『続日本紀』神護景雲元年八月癸巳〔十六日〕条）。

(57) 「東南院文書」第三櫃第二十九巻（『大日本古文書　家わけ第十八ノ二　東大寺文書之二（東南院文書之二）』五四二号、三一三～三二〇頁）。

(58) 吉村武彦「初期庄園の耕営と労働力編成―東大寺領越中・越前庄園から―」（『日本古代の社会と国家』岩波書店、一九九六年、初出一九七四年）。

(59) 「真茂」「小継」「衣女」などの人名を記す墨書土器も同様に、これらの人物にあてられた食膳具であるとみられる。

(60) 天平勝宝七歳五月三日付「越前国使等解」（『東大寺越前国桑原庄券第一』）（『大日本古文書　編年之四』五二～五八頁）。

(61) 庄所（三宅所）は、中心となる屋・倉等の建物およびそれに付属する敷地・畠地等を含めた空間全体のことであるとみなされており、また道路や水路の近辺に位置して交通・運搬に利便な地に所在したことが指摘されている。藤井一二「「荘所」の立地と形成」（『東大寺開田図の研究』塙書房、一九九七年、初出一九八九年）。このような立地の特徴は、労働力編成に関わる問題であり、田地開発や経営を担う「所」に

共通するものであったと考えられる。

古代礪波郡域出土の墨書・刻書土器一覧表

大川原　竜一　編

〔例言〕

1　本表は、古代礪波郡の範囲にあたる砺波市・小矢部市・南砺市において出土した墨書・刻書土器を集成したものである。なお参考として、高岡市に所在する麻生谷遺跡と中保B遺跡を最後尾に付した。

2　集成は、平成29年（２０１７）12月までに刊行された発掘調査報告書等を対象とした。

3　遺跡の配列は、報告書等に記載された遺跡名の五十音順とした。

4　遺跡名の下には、遺跡の所在地を【　】内に表示している。所在地名は報告書等に記載された大字名までを掲載し、番地は省略した。なお一部、市町村合併以前の旧所在地を記したものがある。

5　掲載項目は、①釈文、②器質、③器種、④記銘部位、⑤墨・刻、⑥出典の6項目とした。各項目の記載内容については、以下の通りである。

①釈文　：基本的に出典の表記に則した。文字を判読できないものについては「□」を使用し、不確実な釈文は「宅ヵ」「大ヵ」などとした。また、「×」と「+」および「十」については、明確に「×」と判断できるものを除いて、墨書は「十」、ヘラ・線刻・刻書については「+」に統一した。人面墨書土器や墨画土器については「(人面)」「(馬)」と括弧書きで表記した。

②器質　：器の形質を示す。須恵器は須恵、土師器は土師と略記した。出典に記載のない場合は、「―」と表記した。

③器種　：器の種類を示す。出典に則して坏、皿、蓋、埦などと表記した。出典に記載のない場合は、「―」と表記した。

④記銘部位　：文字等が記されている器の部位を示す。基本的に体部内面・体部外面・底部内面・底部外面の四つに分類し（蓋の場合は、天井部内面・外面、つまみ部内面・外面など）、破片のため記銘部位が不明の場合は、「―」と表記した。

⑤墨・刻　：墨書・刻書の別を示す。墨で文字等が書かれたものを墨書、漆で書かれたものを漆書、器に文字などが刻まれたものを刻書・線刻・ヘラとする。刻書・線刻・ヘラの違いについては、出典の記載に従った。

⑥出典　：墨書・刻書土器が掲載されている発掘調査報告書等の書名を記し、括弧内に刊行年月を記した。

砺波市

1 小杉遺跡

【砺波市小杉】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
1	□(田ないし由ヵ)	土師	椀	底部外面	墨書	砺波市史　資料編1　考古・古代・中世（1990・03）
2	□(田ないし由ヵ)	土師	椀	底部外面	墨書	

2 庄川町第21地区　135地点

【砺波市庄川町示野・金屋】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
3	□	—	—	—	墨書	庄川町埋蔵文化財分布調査報告（2004・09）
4	□	—	—	—	墨書	

3 庄川町第27地区　261地点

【砺波市庄川町金屋】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
5	□	—	—	—	墨書	庄川町埋蔵文化財分布調査報告（2004・09）

4 梅檀野遺跡群　高沢島Ⅱ遺跡

【砺波市増山】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
6	桑ヵ	須恵	蓋	天井部内面	墨書	梅檀野遺跡群予備調査概要（1978・03）
7	□	須恵	坏	底部外面	墨書	

5 徳万頼成遺跡

【砺波市頼成】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
8	×	須恵	坏	体部外面	ヘラ	〈富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告　第69集〉徳万頼成遺跡発掘調査報告　国道359号砺波東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘報告　1（2016・03）

6 久泉遺跡

【砺波市久泉】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
9	□	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	久泉遺跡発掘調査報告　3　平成17年度一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書（2007・03）
10	×	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
11	××	須恵	蓋	天井部内面 天井部外面	ヘラ ヘラ	
12	—	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
13	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
14	—	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
15	=	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
16	×	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
17	—	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	

7 安川天皇窯跡

【砺波市安川】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
18	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	安川天皇窯跡発掘調査報告　梅檀野窯跡群における須恵器窯跡の調査（2005・03）
19	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
20	□	須恵	坏	底部外面	ヘラ	

小矢部市

1 石名田木舟遺跡

【小矢部市石名田・高岡市（旧西礪波郡福岡町）木舟】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
1	—	須恵	坏	底部外面	ヘラ	〈富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告　第14集〉石名田木舟遺跡発掘調査報告　第1分冊（古代以前編）能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告　3（2002・03）
2	—	須恵	坏	底部内面	ヘラ	
3	真□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
4	厨	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
5	T	須恵	坏	底部外面	墨書	
6	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
7	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
8	[…]	須恵	蓋	天井部外面	ヘラ	
9	□	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
10	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
11	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
12	□	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
13	十	須恵	坏	底部外面	漆書	
14	サ	須恵	坏	底部内面	墨書	
15	河王ヵ	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
16	××	須恵	坏	体部外面 底部外面	ヘラ ヘラ	
17	□	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
18	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
19	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
20	□	須恵	坏	底部外面	漆書	
21	—	須恵	坏	底部内面	ヘラ	
22	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
23	×	須恵	蓋	天井部外面	ヘラ	
24	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
25	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
26	□麻呂	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
27	□	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
28	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
29	=	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
30	—	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
31	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
32	○	須恵	坏	体部外面	墨書	
33	—	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
34	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
35	□林	須恵	坏	底部外面 底部外面	墨書 ヘラ	
36	⊥	須恵	坏	底部外面	墨書	
37	□	須恵	坏	底部外面	墨書	

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
38	×	土師	埦	底部外面	ヘラ	
39	ー	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
40	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
41	○	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
42	十ー×	須恵	坏蓋	天井部内面 / 天井部内面 / 天井部外面	漆書 / ヘラ / 漆書	
43	ー	須恵	坏蓋	天井部内面	ヘラ	
44	大	須恵	蓋	天井部外面	墨書	
45	ー	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
46	甲	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
47	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
48	×	須恵	蓋	天井部外面	ヘラ	
49	□	須恵	坏蓋	天井部外面	墨書	
50	ー	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
51	ー	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
52	□	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
53	ー	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
54	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
55	士	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
56	ー	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
57	ー	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
58	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
59	ー	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
60	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
61	□	須恵	高台付坏	底部外面	漆書	
62	ー	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
63	七	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
64	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
65	×	須恵	坏	底部内面	ヘラ	
66	□	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
67	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
68	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
69	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
70	七	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
71	＝	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
72	ー	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
73	＝	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
74	田	須恵	坏	底部外面	墨書	
75	ー	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
76	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
77	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
78	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
79	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
80	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
81	○	須恵	坏	底部外面	墨書	
82	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
83	∞	須恵	坏	底部外面	墨書	
84	○×3	須恵	坏	底部外面	墨書	
85	×十	須恵	坏	底部外面 / 底部外面	漆書 / ヘラ	
86	十	須恵	坏	底部外面	漆書	
87	十	須恵	坏	底部外面	漆書	
88	ー三	須恵	坏	底部外面 / 底部外面	墨書 / ヘラ	
89	×	須恵	長頸壺	底部外面	ヘラ	
90	□田	土師	埦	底部外面	ヘラ	
91	善文	須恵	坏蓋	天井部内面	墨書	
92	ー	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
93	キ	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
94	＝	須恵	坏	底部内面	ヘラ	
95	ーT	須恵	坏	底部外面 / 底部外面	漆痕 / ヘラ	
96	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
97	︽	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
98	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
99	×	須恵	高台付坏	底部内面	ヘラ	
100	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
101	□女	須恵	坏	体部外面	墨書	
102	□	須恵	坏	体部外面	墨書	
103	□	土師	坏	体部外面	墨書	
104	*	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
105	下	須恵	高台付坏	底部内面	ヘラ	
106	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	

2 後谷条里遺跡 【小矢部市後谷】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
107	大	須恵	坏蓋	天井部内面	墨書	小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報 平成20年度（2009・03）

3 北反畝遺跡 【小矢部市綾子】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
108	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第36冊〉北反畝遺跡発掘調査概要 富山県小矢部市所在 小矢部市石動駅南第一土地区画整備事業（1992・10）

4 五社遺跡

【小矢部市五社】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
109	□	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	〈富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 第9集〉五社遺跡発掘調査報告 能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 1（1998・03）
110	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨痕	
111	十	須恵	坏	体部外面	墨書	

5 桜町遺跡

【小矢部市桜町】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
112	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第14冊〉桜町遺跡 小三昧前・坂東地区図版編（1986・03） 〈小矢部市埋蔵文化財報告書 第51冊〉桜町遺跡発掘調査報告書 弥生・古墳・古代・中世編 1 第1分冊（2003・03）
113	又	須恵	高台付埦	底部外面	ヘラ	
114	齋□	須恵	壺	体部外面	ヘラ	
115	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
116	□（冊）	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
117	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
118	=	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
119	−	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
120	十	須恵	蓋	天井部外面	漆書	
121	十	須恵	高台付坏	底部外面	漆書	
122	十	須恵	高台付坏	底部外面	漆書	
123	息	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
124	真茂	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
125	和ヵ	須恵	高台付坏	底部外面	墨痕	
126	田志ヵ	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
127	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
128	×	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
129	×	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
130	良人ヵ	須恵	坏	底部外面	墨書	
131	小長	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
132	吉足	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
133	古	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
134	衣丸	須恵	坏	底部外面	墨書	
135	千	須恵	坏	底部外面	墨書	
136	食	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
137	N	須恵	蓋	天井部内面	漆書	
138	長罡神祝	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
139	大祝	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
140	長罡	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
141	大社祝	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
142	祢宜	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
143	真茂	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
144	小継	須恵	坏	底部外面	墨書	
145	衣女	須恵	坏	底部外面	墨書	

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
146	竹長	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
147	二	須恵	坏	底部外面	墨書	
148	中	須恵	坏	体部外面	墨書	
149	主	土師	埦	底部外面	墨書	
150	−	須恵	坏蓋	天井部内面	ヘラ	
151	−	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
152	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
153	×	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	
154	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
155	扱	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
156	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
157	×	須恵	高台付坏	底部内面	ヘラ	
158	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
159	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
160	□	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
161	U	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
162	×	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
163	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
164	□	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
165	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
166	□	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
167	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
168	十	須恵	坏	底部外面	漆書	
169	又	須恵	小型壺	底部外面	ヘラ	
170	長罡	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
171	長罡神祝	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
172	真茂	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
173	島長	須恵	坏	底部外面	墨書	
174	君	須恵	坏	底部外面	墨書	
175	中	須恵	坏	底部外面	墨書	
176	女	須恵	坏	体部外面	墨書	
177	祝ヵ	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
178	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨痕	
179	小継	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
180	千ヵ	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
181	大	須恵	蓋	天井部外面	漆書	
182	廿	須恵	坏	底部外面	墨書	
183	継	須恵	坏	底部外面	墨書	
184	椅家	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
185	大	須恵	高台付坏	底部外面	漆書	
186	二	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
187	尉	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
188	人□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
189	小	須恵	高台付坏	体部外面	墨書	
190	小継	須恵	坏	体部外面	墨書	
191	祝ヵ	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
192	□	須恵	坏	底部内面	ヘラ	
193	十	土師	埦	底部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財報告書 第53冊〉桜町遺跡発掘調査報告書 縄文遺構編 1・弥生・古墳・古代・中世編 2 第1分冊（2004・03）
194	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
195	−	須恵	高台付坏	底部内面	ヘラ	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第75冊〉小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報 平成26年度（2015・03）
196	×	須恵	蓋	天井部外面	ヘラ	
197	×	須恵	蓋	天井部外面	ヘラ	
198	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第77冊〉富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 店舗建設に伴う埋蔵文化財調査（2015・07）
199	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
200	=	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
201	=	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
202	=	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
203	□	須恵	高台付坏	底部内面	線刻	
204	□	須恵	高台付坏	底部内面	線刻	
205	□	須恵	坏	底部外面	漆書	
206	−	須恵	坏	底部外面	ヘラ	

6 下川原遺跡 【小矢部市綾子】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
207	−	須恵	蓋	天井部内面	線刻	
208	*	須恵	坏	底部外面	線刻	
209	−	須恵	坏	底部外面	線刻	
210	天平＋	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	〈富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 第49集〉開蟐大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡発掘調査報告 北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告3（2012・02）
				線刻	線刻	
211	＋	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	
212	−	土師	埦	底部外面	墨書	
213	□	土師	埦	底部外面	墨書	
214	□	土師	皿	体部外面	墨書	
215	□	土師	皿	底部外面	墨書	
216	□	須恵	坏	天井部内面	線刻	
217	十	須恵	蓋	天井部外面	墨書	
218	□	須恵	坏	底部外面	墨痕	
219	□	須恵	坏	底部外面	墨痕	
220	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
221	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
222	□	須恵	坏	底部外面	墨書	
223	□	須恵	坏	体部外面	墨書	
224	−	須恵	坏	底部外面	墨書	

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
225	−□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
226	−□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
227	□	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	
228	−	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	
229	−	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	

7 棚田遺跡 【小矢部市棚田・北［］】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
230	飯室	須恵	坏	底部外面	墨書	
231	□	須恵	坏	底部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第6冊〉小矢部市埋蔵文化財分布調査概報 2 1980年度（1981・03）
232	□	細片	−	−	墨書	

8 埴生南遺跡 【小矢部市埴生】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
233	（人面）	土師	埦	体部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第37冊〉平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報（1993・03）

9 日の宮・道林寺遺跡 【小矢部市道林寺】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
234	郡	土師	坏	底部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第22冊〉富山県小矢部市道林寺遺跡（1987・03）
235	西	須恵	坏	底部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第37冊〉平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報（1993・03）

10 平桜岡山窯跡群 【小矢部市平桜】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
236	□□（勿ないし為）□□（大ないし人）	須恵	無頸壺	底部外面	ヘラ	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第5冊〉平桜岡山3号窯跡（1981・03）
237	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
238	−	須恵	蓋	高台付坏	ヘラ	
239	=	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
240	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
241	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第16冊〉小矢部市埋蔵文化財分布調査概報 5 1983年度（1984・03）
242	−	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
243	キ	須恵	高台付長頸瓶	底部外面	ヘラ	

11 平田・藤森遺跡 【小矢部市平田・藤森・名畑】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
244	豊	須恵	蓋	天井部内面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第12冊〉小矢部市埋蔵文化財分布調査概報 4 1982年度（1983・03）

12 松永遺跡

【小矢部市松永・蓮沼】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
245	□□	須恵	坏	底部外面	墨書	〈小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第6冊〉小矢部市埋蔵文化財分布調査概報2 1980年度（1981・03）
246	□	—	—	—	墨書	

13 水牧遺跡

【小矢部市水牧】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
247	×	須恵	坏	底部外面	線刻	〈富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 第49集〉開静大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡発掘調査報告 北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告3（2012・02）
248	□	須恵	坏	底部外面	線刻	
249	—	須恵	坏	底部外面	線刻	
250	=	須恵	坏	底部外面	線刻	
251	—	須恵	坏	底部外面	線刻	
252	□	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	
253	—	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	
254	—	須恵	高台付坏	底部外面	線刻	

14 谷内2遺跡

【小矢部市埴生】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
255	□（弘ヵ）	蓋	須恵	—	墨書	宮田進一「古代の墨書土器―富山県内出土の墨書土器から―」『埋文とやま』4（1983・08）

南砺市

1 在房遺跡

【南砺市在房】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
1	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	在房遺跡 1 県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 1（2001・03）
2	*	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
3	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
4	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
5	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
6	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
7	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
8	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
9	□	須恵	高台付坏	体部外面	漆書	
10	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
11	□	須恵	高台付坏	体部外面	漆書	
12	□	須恵	蓋	天井部外面	漆書	
13	□	須恵	蓋	天井部外面	漆書	
14	□	土師	椀	底部外面	ヘラ	
15	×	土師	椀	底部外面	ヘラ	在房遺跡 2 県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う埋蔵化財包蔵地の発掘調査報告 2（2002・03）
16	—	須恵	坏	体部外面	ヘラ	

2 岩木尻広谷窯跡

【南砺市安居・岩木】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
17	公四位尼	須恵	壺	体部外面	ヘラ	安念幹倫・山森伸正・林浩明「安居・岩木窯跡群における新資料の紹介Ⅱ」『大境』第9号（1985・10）

3 院林遺跡

【南砺市院林】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
18	××	須恵	蓋	天井部外面 天井部外面	ヘラ ヘラ	〈南砺市埋蔵文化財調査報告書 21〉院林遺跡 1 主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（2007・02）
19	—	須恵	坏	底部外面	ヘラ	

4 梅原胡摩堂遺跡Ⅰ

【南砺市宗守】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
20	林	須恵	坏	底部外面	墨書	〈南砺市埋蔵文化財調査報告書 19〉宗守遺跡 1・久戸遺跡 1・梅原胡摩堂遺跡 1・神成遺跡 4 県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告8（2007・03）
21	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
22	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	

5 梅原出村Ⅲ遺跡

【南砺市梅原・出村】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
23	本（異体字）	須恵	坏	底部外面	墨書	梅原安丸遺跡群 2 県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 2（1992・03）
24	開山	土師質	坏	体部外面	墨書	梅原出村遺跡群1・梅原上村遺跡群1 県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 3（1993・03）
25	開ヵ	土師質	坏	底部外面	墨書	

6 神成遺跡

【南砺市神成】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
26	ωないし人	須恵	坏	底部外面	墨書	〈南砺市埋蔵文化財調査報告書 13〉神成遺跡 3 県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 6（2006・03）
27	ωないし人	須恵	坏	底部外面	墨書	
28	泉ヵ	須恵	坏	底部外面	墨書	
29	ωないし人	須恵	坏	底部外面	墨書	
30	車ヵ	須恵	蓋	天井部外面	墨書	
31	諸	須恵	蓋	天井部外面	墨書	
32	諸	須恵	蓋	天井部外面	墨書	
33	諸	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
34	車ないし東	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
35	キ	須恵	高台付坏	体部外面	ヘラ	

（高岡市・参考1）

麻生谷遺跡 【高岡市麻生谷】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
1	人長	須恵	坏	底部外面	墨書	〈高岡市埋蔵文化財調査報告 第1冊〉麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告―平成4～7年度、主要地方道小矢部伏木港線道路改良工事に伴う調査―（1997・03）

（高岡市・参考2）

中保B遺跡 【高岡市中保】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
1	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	〈高岡市埋蔵文化財調査報告 第8冊〉中保B遺跡調査報告―中保土地区画整理組合による高岡市中保地区の区画整理事業に伴う調査―（2002・03）
2	―	須恵	坏	底部内面	ヘラ	
3	―	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
4	×	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
5	×	須恵	坏	体部外面	ヘラ	
6	―	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
7	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
8	×	須恵	坏	体部内面	ヘラ	
9	―	須恵	坏	底部外面	ヘラ	
10	―×4	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
11	―	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	
12	×	須恵	蓋	天井部外面	ヘラ	
13	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
14	×	須恵	蓋	天井部内面	ヘラ	
15	―	土師	坏	底部外面	ヘラ	
16	大家	須恵	坏	底部外面	墨書	
17	□家	須恵	坏	底部外面	墨書	
18	大	須恵	坏	底部外面	墨書	
19	罪家	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
20	二	須恵	坏	底部外面	墨書	
21	岐佐女	須恵	坏	底部外面	墨書	
22	林□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
23	□月ヵ	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
24	林前	須恵	坏蓋	天井部内面	墨書	
25	×	須恵	蓋	天井部外面	漆書	
26	秋刀自女	須恵	坏蓋	天井部外面	墨書	
27	諸人	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
28	諸人	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	

7 高瀬遺跡 【南砺市高瀬】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
36	十	須恵	高台付坏	底部外面	漆書	富山県埋蔵文化財調査報告書 3 井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書（1974・03）
37	家成	須恵	坏	底部外面	墨書	
38	尓ヵ	土師	皿	底部外面	ヘラ	
39	衣□□（万呂カ）	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
40	衣□（万ヵ）	須恵	坏	底部外面	墨書	
41	□丸	土師	皿	底部外面	墨書	
42	南□□（万呂カ）	須恵	坏	底部外面	墨書	
43	□（足ヵ）	土師	坏	底部外面	墨書	
44	衣	須恵	坏	底部外面	墨書	
45	□□□□（凡万呂ないし宅ヵ）	須恵	坏	底部外面	墨書	山森伸正「高瀬公民館裏出土の墨書土器」「富山考古学会連絡紙」101（1985・05）
46	三宅女ヵ	須恵	坏	底部外面	墨書	
47	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	〈南砺市埋蔵文化財調査報告書 31〉富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告 7 井波地域 2 2011年度（2012・03）

8 田尻遺跡 【南砺市田尻】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
48	大	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	東海北陸自動車道関連発掘調査概報 3 梅原胡摩堂遺跡・田尻遺跡（1992・03）

9 寺家廃寺跡 【南砺市寺家】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
49	×	須恵	坏	底部外面	ヘラ	〈南砺市埋蔵文化財調査報告書 25〉寺家廃寺跡 2・院林遺跡 3（2009・02）
50	―	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	

10 徳成2遺跡 【南砺市徳成】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
51	央	須恵	蓋	天井部内面	墨書	徳成2遺跡 1 県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 1（2001・03）
52	□	須恵	坏	底部外面	墨書	

11 安居大堤窯跡 【南砺市安居・岩木】

No.	釈文	器質	器種	記銘部位	墨・刻	出典（刊行年月）
53	×	須恵	高台付坏	底部外面	ヘラ	安念幹倫・林浩明「安居・岩木窯跡群における新資料の紹介Ⅰ」「大境」第8号（1984・10）

29	諸人	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
30	諸人	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
31	内	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
32	内	須恵	坏	底部外面	墨書	
33	内ヵ	須恵	坏	底部外面	墨書	
34	内	須恵	蓋	天井部外面	墨書	
35	内	須恵	高台付坏	底部外面	刻書	
36	内ヵ	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
37	内	須恵	坏蓋	天井部外面	墨書	
38	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
39	案調	須恵	坏	底部外面	墨書	
40	案調	須恵	坏	底部外面	墨書	
41	案調	須恵	坏	底部外面	墨書	
42	案調	須恵	坏	底部外面	墨書	
43	案調	須恵	坏	底部外面	墨書	
44	案調	須恵	坏	底部外面	墨書	
45	□調ヵ	須恵	坏	底部外面	墨書	
46	案調ヵ ×	須恵	坏	底部外面 底部外面	墨書 ヘラ	
47	案調 ×	須恵	坏	底部外面 底部外面	墨書 ヘラ	
48	案鳥	須恵	坏	底部外面	墨書	
49	案鳥 ×	須恵	坏	底部外面 底部外面	墨書 ヘラ	
50	案鳥	須恵	坏	底部外面	墨書	
51	□（案ヵ）調	須恵	坏	底部外面	墨書	
52	案□ 一	須恵	坏	底部外面 底部外面	墨書 ヘラ	
53	□鳥ヵ	須恵	坏	底部外面	墨書	
54	□□（案調ヵ）	須恵	坏	底部外面	墨書	
55	調ヵ ×	須恵	坏	底部外面 底部外面	墨書 ヘラ	
56	案□	須恵	坏	底部外面	墨書	
57	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
58	林家	須恵	坏	底部外面	墨書	
59	津三	須恵	坏	底部外面	墨書	
60	□	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
61	秋麻呂	須恵	坏	底部外面	墨書	
62	□廣ヵ	須恵	坏蓋	天井部内面	墨書	
63	明	須恵	蓋	天井部内面	墨書	
64	明	須恵	坏蓋	天井部内面	墨書	
65	明	須恵	高台付坏	底部外面	墨書	
66	二	須恵	坏	底部外面	墨書	
67	稲罡	土師	坏	底部外面	墨書	
68	□	須恵	坏	体部外面	墨書	
69	□ □（工ヵ）	土師	坏	体部外面 底部外面	墨書 墨書	
70	□□	須恵	蓋	天井部内面	墨書	

Ⅱ〔研究ノート〕

宮本輝の随筆で取り上げられている素材について

菅田　智雄

宮本輝の随筆で取り上げられている素材について

菅田　智雄

一、はじめに

宮本輝は、小説作品の他に、多くの随筆を手がけている。自身の生い立ちやエピソードを披瀝したものや、小説作品の舞台裏を明かし、作品に込めた思いを述べたもの、対象物（人物や書物）に対する感想を陳述したもの、そして、自身の人生経験から醸成された人生論、文学論を展開したものなどがあり、その内容はバラエティに富み、長短もさまざまである。

これまでの宮本輝文学の研究は、主に小説作品に焦点が当てられ、進められてきた。従って、宮本輝の随筆は、小説作品を考察する論拠として言及されるか、あるいは、年譜を作成する上での根拠として扱われる程度にしか過ぎなかった。しかしながら、宮本輝自身が「どんなに短いエッセーにも、書き手の底力（そこぢから）、もしくは、思想の正体が、じつに見事に露呈される」（『宮本輝全集』第十四巻「後記」）と述べるとおり、その執筆には、小説の創作と同様、相当の気概と覚悟がともなわれている。また、小説の素材を随筆の中に注ぎ込んでいるとし、「エッセーも、私にとっては、ときに短い小説であったりもする」（『宮本輝全集』第四巻「後記」）とまで言っている。とすれば、宮本輝文学の特性を解き明かすためには、小説作品のみならず随筆にも焦点を当て、その文学性にもっと着目すべきではないかと考えるのである。

そこで本稿では、その文学的特徴を明らかにするための基礎作業として、これまで単行本化されている随筆集（『二十歳の火影』（講談社、一九八〇年）、『命の器』（講談社、一九八三年）、『異国の窓から』（光文社、一九八八年）、『本をつんだ小舟』（文芸春秋、一九九三年）、『生きものたちの部屋』（新潮社、一九九五年）、『ひとたびはポプラに臥す』（講談社、一九九七年～二〇〇〇年）、『血の騒ぎを聴け』（新潮社、二〇〇一年）、『真夜中の手紙』（新潮社、二〇一一年）、『いのちの姿（完全版）』（集英社文庫、二〇一七年）全九冊に収録された全作品を対象とし、[1]その一篇一篇が扱う素材を年譜上に位置づける作業を試みた。宮本輝の随筆の多くは、過去の体験なり出来事をもとにしたものが多く、整理に便であると考えたためである。[2]なお、中には過去の体験なり出来事を題材としない類いのもの（人生論、文学論を述べたものなど）があるが、それらは末尾に「その他」として並べることとした。[3]

この基礎作業が、今後の宮本輝文学研究に新たな一視点を提供できれば幸いである。

二、宮本輝の随筆における素材について

※凡例：

・以下の文献等を参考に、年譜を作成し、その上に随筆の各篇が取り上げることがらを配置した。

宮本輝公式サイト「The Teru's club」、追手門学院大学附属図書館　宮本輝ミュージアム　展示年譜、二瓶浩明編『近代文学書誌大系２　宮本輝書誌』（和泉書院、一九九二年）、「宮本輝　新潮四月臨時増刊」（新潮社、一九九九年）、『宮本輝の本―記憶の森』（宝島社、二〇〇五年）、二瓶浩明著『近代文学書誌大系５　宮本輝書誌Ⅱ』（和泉書院、二〇一二年）、『宮本輝　人間のあたたかさと、生きる勇気と。』（高志の国文学館・姫路文学館編、二〇一七年）

・各年の事項欄に、各随筆が言及することがらを記し、随筆の篇名及び収録随筆集を【　】で示した。随筆の篇名は、基本的に単行本（初版本）での記載に合わせた。ただし、『いのちの姿』については、単行本（初版本）収録のものに加え、五篇の随筆を新たに追加した『いのちの姿（完全版）』（文庫版）を用い、その篇名を記した。

・随筆を所収する単行本の名称は、（　）にてその略称を記した。使用略称は、以下のとおり。『二』：『二十歳の火影』（講談社、一九八〇年）、『命』：『命の器』（講談社、一九八三年）、『異』：『異国の窓から』（光文社、一九八八年）、『本』：『本をつんだ小舟』（文芸春秋、一九九三年）、『生』：『生きものたちの部屋』（新潮社、一九九五年）、『ひ』：『ひとたびはポプラに臥す』

（講談社、一九九七年～二〇〇〇年）、『血』：『血の騒ぎを聴け』（新潮社、二〇〇一年）、『真』：『真夜中の手紙』（新潮社、二〇一一年）、『い』：『いのちの姿（完全版）』（集英社文庫、二〇一七年）。なお、『ひとたびはポプラに臥す』は、全六巻あるため、丸数字で巻数をあらわした。

〈年譜および随筆で取り上げられていることがら〉

1947年　昭和二十二年　0歳

・三月六日、兵庫県神戸市弓木町に、自動車部品を扱う事業経営者である父・宮本熊市と、母・雪恵の長男として誕生。本名、宮本正仁。【「橋の上で尻もち」（『血』）】

・正仁は腺病質で、母は毎日病院通いに明け暮れた。父は正仁を溺愛した。【「父がくれたもの」（『命』）】

・父は、日中戦争前まで対中国貿易を営んでいた。【「そんなつもりでは……」（『い』）】

1950年　昭和二十五年　3歳

・四月、父親の郷里、愛媛県南宇和郡一本松村に隣接する同郡城辺町に転居。

・伊予の一本松村での闘牛のことが、記憶に残っている。【「『流転の海』第二部について」（『血』）】

1952年　昭和二十七年　5歳

・三月、大阪市北区中之島に住む。

・四月、西区九条の幼稚園に入園するが、半年で退園。幼稚園では左利きを矯正させられる。【「母と子」（『二』）、「ゴルフ道具」（『生』）】

・台湾から来たコウが我が家に出入り。父は中華料理店を経営。【「象牙石」（『い』）】

・ポンポン船の思い出。【「「泥の河」の周辺」（『二』）、「土佐堀川からドナウ河へ　その一」（『い』）】

・父と母との間にはいさかいが多く、母は正仁を連れてよく家出する。【「街の中の寺」（『命』）】

・毎夜のように寝小便をしていたが、鍼灸師による治療で治る。【「正月の、三つの音」（『二』）】

・背丈程もあるおもちゃの刀を買ってもらう。【「「泥の河」の周辺」（『二』）】

・直径一メートルの大きな地球儀の前に立った記憶。【「地球儀」（『生』）】

1953年　昭和二十八年　6歳

・四月、大阪市立曾根崎小学校に入学。【「大岡昇平「野火」」（『本』）、「蜜柑山からの海」（『い』）】

・警察署南側にあった細い露地を通って登校。【「曽根崎警察署横の露路」（『二』）】

・よく風邪をひき、学校を休むことが多かった。【「父がくれたもの」（『命』）】

1954年　昭和二十九年　7歳

・老人性痴呆症だった祖母・ふさ（82歳）が失踪。消息不明のまま葬儀を行う。

・大型台風の被害で、父親の事業が大打撃を受ける。【「大晦日の書斎」（『生』）、「風の渦」（『い』）】

・小学校近くの時計屋に通い、カラクリ人形修復作業を見る。【「腕時計」（『生』）】

・下校後、曾根崎新地にある級友の家、阪急百貨店や阪神百貨店で遊ぶ。【「絵具」（『生』）】

・この頃、よく父に手を引かれて銭湯へ行く。【「夜空の赤い灯」（『二』）】

・この頃、占いで「うまく行けば偉大な芸術家になる」と言われる。【「うまく行かなかったら」（『二』）】

・この頃、父と一緒によく競馬場へ行く。【「馬を持つ夢」（『命』）】

・この頃、デンスケという名の犬を飼う。【「私の愛した犬たち」（『命』）】

・この頃、麻雀を覚える。【『ひ』①第3章】

・この頃、父母に連れられて「播半」に行く。【「橋の上で尻もち」（『血』）】

1955年　昭和三十年　8歳

・級友の女の子の思い出。【「よっつの春　遠足」（『血』）】
・この頃、母の財布から十円玉を盗み、アメ玉を買い、父に叱られる。【「メリメ「マテオ・ファルコネ」」（『本』）】
・この頃、酔っぱらった父の演説をよく聞かされる。【『ひ』③第8章】
・母と一緒に銭湯へ行き、女湯と男湯と行ったり来たりする。【「絵具」（『生』）】
・武庫川に泳ぎに行く。【「写真のあとさき」（『い』）】

1956年　昭和三十一年　9歳
・四月、父親の事業のため、富山市豊川町に転居。富山市立八人町小学校に転入。
・四天王寺参詣。【「街の中の寺」（『命』）】
・富山に行く際、父にトランジスタ・ラジオを買うようねだるも叱られる。【「2011/06/10〈金〉03：55」（『真』）】
・富山行きの立山一号が石川と富山の国境で立ち往生。【「私と富山」「能登の虹」（『二』）、「吹雪」「わが心の雪」（『命』）】
・いたち川のほとりに住居を定めて暮らす。【「川」（『二』）、「2011/06/04〈土〉13：13」（『真』）】
・越前海岸への旅行。【「越前海岸」（『二』）】
・魚津で鮫を食べる。【「クラドヴォヘ」（『異』）】
・夏、父親が単身で帰阪。
・母親と二人で富山市大泉本町にある大工の家の二階を借りて生活。【「田園の光」（『い』）】
・父の仕送りは滞りがち。母の出す料理はナスばかり。【「悲しかった食事」（『血』）】

1957年　昭和三十二年　10歳
・三月、尼崎市立難波小学校に転入。
・四月に入って二回も大雪に見舞われる。【「雪とれんげ畑」（『二』）】
・父親の事業の失敗にともない帰阪。生活は一層苦しくなる。【「雪とれんげ畑」（『二』）】
・富山から大阪へ向かう車中で「名馬、風の王」を読む。【「拝啓アラビア馬・ゴドルフィン様」（『二』）、「「風の王」に魅せられて」（『命』）】
・兵庫県尼崎市に住む父親の妹のもと（トンネル長屋）に預けられ、親子別々の生活になる。【「街の中の寺」（『命』）、『ひ』②第6章、『ひ』⑤第15章、『ひ』⑥第18章、「トンネル長屋」（『い』）】
・この頃、学校で「青ぼうたん」とあだ名をつけられる。【「夕刊とたこ焼き」（『二』）】
・父に連れられて京都競馬場に出入りする。【「馬を持つ夢」「私の「優駿」と東京優駿」（『命』）】
・この頃、詩を書く。【「山頭火句集」（『本』）】

1958年　昭和三十三年　11歳
・叔母の家に預けられたまま、正月を迎える。【「正月の、三つの音」（『二』）】
・六月、大阪市福島区上福島に転居。両親との生活を再開する。近くに阪神電車の〈あかずの踏切り〉があった。【「あうんの坩堝」（『血』）】
・この頃、二匹目の犬マリを飼う。【「私の愛した犬たち」（『命』）】
・ウラニウムの原石を見学したときのことを作文に書く。【「山頭火句集」（『本』）】

1959年　昭和三十四年　12歳
・三月、尼崎市立難波小学校を卒業。
・四月、私立関西大倉中学校に入学。
・家の近くにあった小さなお好み焼き屋の老夫婦が姿を消す。【「ガラスの向こう」（『い』）】
・仲の良かった北朝鮮の友人を見送る。【「中野重治「雨の降る品川駅」」（『本』）】
・中学生になっても小学生程度の体格で、勉強も嫌いだった。【「父がくれたもの」（『命』）、『ひ』⑥最終章】
・父とともにタクシーで金沢へ行こうとする。【「永井龍男「蜜柑」」（『本』）】

1960年　昭和三十五年　13歳

・貧困の上、父親の女性問題、母親のアルコール依存症のため、家庭環境が悪化。【「フローベル「トロワ・コント」」「宇野千代「おはん」」（『本』）】
・現実逃避の手段として押入れの中での読書が始まる。このときに読んだ、井上靖「あすなろ物語」の感動が読書熱に火をつける。【「青春の始まりの日」「押し入れの中」（『二』）、「十冊の文庫本」「命の力」（『命』）、「井上靖「あすなろ物語」」（『本』）、「文庫本のたたずまい」（『血』）】
・梅田の繁華街で十冊の文庫本を購入。【「十冊の文庫本」（『命』）】
・内なる女性との出会い。【「内なる女」と性」（『命』）】
・「河西回廊」という言葉の記憶。【『ひ』①第3章】
・この頃、俳句をつくる。【「山頭火句集」（『本』）】
・読書体験：【「カミュ「異邦人」」「泉鏡花「高野聖」」「樋口一葉「にごりえ」」（『本』）、「書物の思い出」（『い』）】

1961年　昭和三十六年　14歳

・読書体験：【「花火のあと」（『二』）、「成都へ」（『異』）、「ドストエフスキー「貧しき人々」」「上林暁「野」」（『本』）、「『錦繡』『避暑地の猫』」（『血』）】

1962年　昭和三十七年　15歳

・三月、私立関西大倉中学校を卒業。
・四月、同校普通科に入学。【「土曜日の迷路」（『二』）】
・父親が自動車修理と板金塗装を専門とする工場の経営を始める。
・父と映画を見に行く。【「スパルタカスのテーマ」（『二』）】
・父に連れられて京都競馬場へ行く。【「柳田國男「山の人生」」（『本』）】
・父に頼まれて借金返済に赴く。【「中野重治「雨の降る品川駅」」（『本』）】
・父をうとましく思う。【「サマセット・モーム「雨」」（『本』）】
・冬、「阪神裏」に繰り出す。【「正月の静寂」（『二』）、「「内なる女」と性」（『命』）】
・読書体験：【「ジョセフ・コンラッド「青春」」「山本周五郎「青べか物語」」「ファーブル「昆虫記」」「宇野千代「おはん」」「水上勉「飢餓海峡」」「ゴーゴリ「外套」」「三好達治「測量船」」「大岡昇平「野火」」（『本』）】

1963年　昭和三十八年　16歳

・夏、伊豆旅行。【「チューホフ「恋について」」（『本』）】
・友人Tとの思い出。【「過ぎし日の二日酔い」（『二』）】
・ナイフの思い出。【『ひ』⑤第14章】
・読書体験：【「寺山修司歌集」「柳田國男「山の人生」」「「老舎「茶館」」「ツルゲーネフ「はつ恋」」「山頭火句集」「メリメ「マテオ・ファルコネ」」（『本』）】

1964年　昭和三十九年　17歳

・読書体験：【「ボードレール「悪の華」」「フォースター「インドへの道」」「永井龍男「蜜柑」」「深沢七郎「楢山節考」」「ラディゲ「肉体の悪魔」」（『本』）】

1965年　昭和四十年　18歳

・三月、私立関西大倉高校普通科卒業。大学受験に失敗、浪人生活に入る。
・受験勉強はせず、中之島図書館に通い、読書に耽る。【「精神の金庫」（『命』）、「贅沢な青春」（『血』）】
・私立大学受験のため東京へ向かうが、途中、熱海で下車する。【「途中下車」（『二』）】
・父に頼まれ、借金返済のため城崎へ行く。【「柳田國男「山の人生」」（『本』）】
・取り立て屋の待ち伏せにより、予備校に行けなくなる。【「ガラスの向こう」（『い』）】
・読書体験：【「チェーホフ「恋について」」「北杜夫「どくとるマンボウ航海記」」「島崎藤村「夜明け前」」（『本』）】

1966年　昭和四十一年　19歳

・追手門学院大学文学部に入学。体育会テニス部に入部。【「恥かしい時代」（『二』）、「雨の日に思う」（『命』）、「再び、ゴルフ道具」（『生』）】
・父との思い出。【「過ぎし日の二日酔い」（『二』）、「ボードレール「悪の華」」（『本』）】

1969年　昭和四十四年　22歳

・四月、父、熊市死去（享年70歳）。【「夜空の赤い灯」「雪とれんげ畑」「恥かしい時代」「二十歳の火影」「二十代の履歴書」「五十肩」「越前海岸」（『二』）、「大地」（『命』）、「レーゲンスブルクへ」（『異』）、『ひ』④第11章、『ひ』⑥第18章、「悲しかった食事」「『錦繡』の一読者への返信」（『血』）】
・大阪府大東市泉町に転居。父親の残した多大な借金の取り立てから逃げるように、母親とともに転居。【「スパルタカスのテーマ」（『二』）】
・この頃、道頓堀界隈で酒や博打に明け暮れる。【「地獄の数」（『二』）、「街の中の寺」（『命』）】
・道路工事、バーテン、ウェイター、ホテルのボーイ、中央卸売市場など、アルバイトを転々とする。【「「道頓堀川」の映画化」（『命』）】
・この頃初めて上京。【「東京は嫌い」（『命』）】
・父との会話の思い出。【『ひ』⑤第14章「お天道様だけ追うな」「『優駿』」（『血』）】
・その他大学生の頃の出来事を取り上げたもの。【「恥かしい時代」「二十代の履歴書」「「道頓堀川」のこと」（『二』）、「私の「優駿」と東京優駿」（『命』）】

1970年　昭和四十五年　23歳

・三月、追手門学院大学文学部卒業。この大学生活が後に「青が散る」となる。
・出席日数の不足で単位不足。追試受験の末の卒業。【「恥かしい時代」「二十代の履歴書」（『二』）】
・サンケイ広告社に入社。コピーライターとして企画制作部に配属される。【「雨やどり」（『二』）、「東京は嫌い」（『命』）、「兄」（『い』）】
・入社三ヶ月でサラリーマンには向いていないと悟る。【「2011/07/31〈日〉18：47」（『真』）】
・この頃、競馬に熱中する。【「改札口」「私の「優駿」と東京優駿」「錦繡の日々」（『命』）】

1972年　昭和四十七年　25歳

・強度の不安神経症にかかる。以後毎日発作に苦しむ。通勤にも困難をきたす。【「「内なる女」と性」「命の力」（『命』）、『ひ』②第6章、『ひ』⑤第15章、「『春の夢』」（『血』）、「パニック障害がもたらしたもの」「人々のつながり」（『い』）】
・九月、大山妙子と結婚。【「二十代の履歴書」（『二』）】
・出張の際、地上の乗物を利用。【「夜空の赤い灯」（『二』）】
・伊丹市御願塚にて、母親と3人での生活が始まる。【「蜥蜴」（『二』）】
・競馬の思い出。【「正月競馬」（『命』）】
・読書体験：【「ドルトン・トランボ「ジョニーは戦場へ行った」」（『本』）】

1973年　昭和四十八年　26歳

・十二月、CM制作者・杉山登志氏の自殺報道に、同業者として感じるところが大きかった。【「雨やどり」（『二』）】

1974年　昭和四十九年　27歳

・五月、長男、陽平誕生。【「へんてこりんな犬」（『生』）】
・この頃初めて小説を書く。タイのバンコクを舞台に「弾道」を書く。後の「愉楽の園」の原型となる。【「「泥の河」「螢川」「道頓堀川」」「「愉楽の園」」（『血』）】
・本屋での文芸誌の立ち読みから、小説家になろうと決心する。【「二十代の履歴書」「雨やどり」（『二』）、「命の力」（『命』）、「メリメ「マテオ・ファルコネ」」「ラディゲ「肉体の悪魔」」（『本』）、「パニック障害がもたらしたもの」（『い』）】
・鳩摩羅什のことを知る。【「旅の始まりに」『ひ』①】

1975年　昭和五十年　28歳

・八月、サンケイ広告社を退社。以後、本格的に自宅で小説を書き出す。【「不思議な花火」（『二』）、「正月競馬」「改札口」「芥川賞と私」「錦繡の日々」（『命』）、「インクと万年筆」（『生』）、「「扉の向こう」「『螢川』について」（『血』）、『ひ』③第10章、『ひ』⑤第14章、『ひ』⑤第15章】
・十月、次男、大介誕生。【「二十代の履歴書」（『二』）】病院の支払いを終え

て所持金５００円。【「ブダペストへ」（『異』）】
・この頃、同人誌「わが仲間」主宰者の池上義一氏と出会う。「あなたは天才かもしれない」という励ましが原動力となり精力的に作品を書く。【「命の力」（『命』）、「パッサウへ」（『異』）、「『泥の河』『螢川』『道頓堀川』」（『血』）】
・宝塚の遊園地へ行く。【「よっつの春　カメラ」（『血』）】

1976年　昭和五十一年　29歳
・建設金物業の和泉商会に再就職するも二ケ月ほどで退社。【「人々のつながり」（『い』）】
・この頃書いた「舟の家」を書き直し、「泥の河」と改題し、太宰治賞に応募する。【「二十代の履歴書」（『二』）、「命の力」「泥の河」の風景」（『命』）、「2011/06/06〈月〉02：28」（『真』）】
・わずかな預金と失業保険で食いつなぎ、小説を書き続ける。【「不思議な花火」（『二』）、「改札口」（『命』）】
・「螢川」を書く。【「川」三部作を終えて」（『命』）、「『泥の河』『螢川』『道頓堀川』」（『血』）】

1977年　昭和五十二年　30歳
・池上義一が経営する、美容理容業界向けのＰＲ誌の製作販売会社ＢＢＣに入社。【「命の力」（『命』）】
・七月、「泥の河」（「文芸展望」18号）【「不思議な花火」（『二』）】
・「泥の河」で第13回太宰治賞を受賞。【「インクと万年筆」（『生』）、「ディテールと底力―宮尾登美子」「『泥の河』『螢川』『道頓堀川』」（『血』）】
・十月、「螢川」（「文芸展望」19号）【「「川」三部作を終えて」（『命』）、「『螢川』について」（『血』）】
・十一月、奥能登取材旅行。【「能登の虹」「海ぞいの道」（『二』）】
・レコード店での思い出。【「かぐや姫の「神田川」」（『命』）】

1978年　昭和五十三年　31歳
・一月、「螢川」で第78回芥川龍之介賞受賞。作家として生活できるようになる。【「川」「夜空の赤い灯」「手紙」「蟹になりそこねる」（『二』）、「アラマサヒト氏からの電報」「芥川賞と私」（『命』）、「地球儀」（『生』）、「『泥の河』『螢川』『道頓堀川』」「歳相応は難しい」（『血』）】
・一月、田辺聖子氏宅訪問。【「星を見る人―田辺聖子」（『血』）】
・四月、「道頓堀川」（「文芸展望」21号）【「「川」三部作を終えて」（『命』）、「「道頓堀川」のこと」「『泥の河』『螢川』『道頓堀川』」（『血』）】
・九月、「青が散る」連載開始（「別冊文藝春秋」１４５号。１９８２年夏１６１号まで）【「『青が散る』」（『血』）】
・十月、友人と東北旅行へ行き、出先で喀血する。このときの旅行が後に「錦繡」になる。【「黯い道」（『二』）、「錦繡の日々」（『命』）、「三つの〈初めにありき〉」「『錦繡』の一読者への返信」（『血』）】
・服飾デザイナーの森南海子氏と対談。【「曽根崎警察署横の露路」（『二』）】
・母が五十肩になる。【「五十肩」（『二』）】
・地方都市にて、読書会で講演。【「文学のテーマとは、と問われて」（『二』）】
・テレビ出演のため富山へ。【「わが心の雪」（『命』）、「2011/06/10〈金〉03：55」（『真』）】
・この頃、「優駿」を構想。【「私の「優駿」と東京優駿」「風の王」に魅せられて」（『命』）】

1979年　昭和五十四年　32歳
・一月、肺結核で入院。退院後、自宅療養に入る。【「闘病記」「花火のあと」「快食、快眠、快便」（『二』）、「雨の日に思う」「蟻のストマイ」（『命』）、「軽井沢の仕事場」「酒と酒器」（『生』）、『ひ』②第６章、「よっつの春　土筆」「能く忍ぶ」「優しさと野鳥たちとの対話と」「悲しかった食事」「『錦繡』の一読者への返信」「『青が散る』」（『血』）、「2011/07/29〈金〉14：13」（『真』）、「風の渦」「パニック障害がもたらしたもの」「消滅せず」（『い』）】
・七月、『幻の光』（新潮社）【「「川」三部作を終えて」（『命』）】
・十月、伊丹市中野北に転居。入院中に自宅が建つ。【「生きものたちの部屋」（『生』）】
・この頃、大乗仏典の渡来に関する書物を読み漁る。【「母と子」（『二』）】

・荒正人氏の訃報に触れる。【「アラマサヒト氏からの電報」（『命』）】
・この頃、「泥の河」映画化の話が持ち込まれる。【「「泥の河」の風景」「「泥の河」の映画化」（『命』）】
・この頃、「流転の海」を構想。【「『流転の海』『地の星』」（『血』）】

1980年　昭和五十五年　33歳

・四月、『二十歳の火影』（講談社）
・知人の紹介で軽井沢に貸別荘を借りる。
・母親が胃癌の手術を受ける。このことが、後に「眉墨」となる。以後、毎年夏は仕事場を軽井沢に移す。【「宇野千代「おはん」」（『本』）、「軽井沢の仕事場」（『生』）、「母への手紙―年老いたコゼット」（『血』）】
・「西瓜トラック」の思い出。【「生きものたちの部屋」（『生』）】

1981年　昭和五十六年　34歳

・四月、『星々の悲しみ』（文藝春秋）
・五月、『道頓堀川』（筑摩書房）【「「川」三部作を終えて」（『命』）、「『泥の河』『螢川』『道頓堀川』」（『血』）】
・同月、「泥の河」が小栗康平監督により映画化。モスクワ国際映画祭で銀賞を受賞する。【「「泥の河」の風景」（『命』）】
・十二月、「錦繡」（「新潮」）【「三つの〈初めにありき〉」「『錦繡』『避暑地の猫』」（『血』）】
・四天王寺を取材訪問。【「街の中の寺」（『命』）】
・この頃、井上靖氏と面会。【「その偉大な質と量」（『血』）】
・結核の薬の服用が終了。【「パニック障害がもたらしたもの」（『い』）】

1982年　昭和五十七年　35歳

・一月、「流転の海　第一部」連載開始（「海燕」創刊号。1984年4月号まで）【「『流転の海』『地の星』」（『血』）】
・同月、「棲息」連載開始（「文學界」1984年6月号まで。単行本化に際して「春の夢」と改題）【「『春の夢』」（『血』）】
・四月、「優駿」連載開始（「小説新潮スペシャル」春号。連載第二回以降は『新潮』に掲載。1986年8月号まで）【「私の「優駿」と東京優駿」「「風の王」に魅せられて」（『命』）、「殺し馬券」（『い』）】
・六月、「道頓堀川」が深作欣二監督により映画化。【「「道頓堀川」の映画化」（『命』）】
・九月、「時計屋の息子」（連作小説集「夢見通りの人々」の初篇）（「小説新潮」1985年11月号まで）【「「夢見通りの人々」『葡萄と郷愁』」（『血』）】
・十月、朝日新聞連載小説の取材のため、東西ヨーロッパから更に黒海までドナウ流域を下る6ヶ国（西ドイツ、オーストリア、ユーゴスラビア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア）へ取材旅行。この旅行が後に「ドナウの旅人」となる。【「潮音風声」（『命』）、「ニュールンベルクへ」（『異』）、「インクと万年筆」（『生』）、『ひ』④第13章、「乗り物嫌いの旅行好き」「チトー将軍通り」「『青が散る』」「『ドナウの旅人』」（『血』）、「2011/05/05〈木〉02：26」（『真』）、「土佐堀川からドナウ河へ　その一」「土佐堀川からドナウ河へ　その二」（『い』）】
・ハンガリー人の青年、センダヘーイ・イシュトヴァーンと知り合う。【「ハンガリーの夏」（『血』）】
・小栗康平監督と再会。【「小栗康平氏のこと」（『命』）】
・書評：【「故郷を持たぬ旅人―水上勉紀行文集」】

1983年　昭和五十八年　36歳

・アメリカンビーグルの子犬が来る。〝マック〟と命名。【「私の愛した犬たち」（『命』）、「へんてこりんな犬」（『生』）、「犬たちの友情」「早射ちマックも歳を取った」（『血』）】
・五月、ギリシャへ取材旅行。後に「海辺の扉」となる。
・九月、日中文化交流協会の日本作家代表団として中国を訪問。【「大地」（『命』）、「成都へ〈中国〉ドナウの旅ふたたび」（『異』）、「老舎「茶館」」（『本』）、「絵具」（『生』）、『ひ』①第1章、「白鳥と、その足―中国への旅　桂林・上海」「大雁塔から渭水は見えるか」（『血』）、「2011/04/28〈木〉02：42」（『真』）】

・十月、「避暑地の猫」連載開始（「IN★POCKET」1984年11月号まで）【『錦繡』『避暑地の猫』（『血』）】
・同月、『命の器』（講談社）
・十一月、「ドナウの旅人」連載開始（「朝日新聞」1985年5月まで）【「ハンガリーの夏」（『血』）】
・同月、野性時代新人文学賞の選考委員となる。（1985年まで）
・小林秀雄氏逝去。【「潮音風声」（『命』）】
・寺山修司氏逝去。【「寺山修司歌集」（『本』）】
・中上健次氏との思い出。【「喪失」（『血』）】
・書評：【「折れない針―宮尾登美子『つむぎの糸』」（『血』）】

1984年　昭和五十九年　37歳
・三月、ローマへ。【「ローマへ〈イタリア〉ドナウの旅ふたたび」（『異』）】
・春、ハンガリーのブダペストで通訳をした青年、セルダヘイ・イシュトヴァーンが留学のため来日。以後3年間、日本での保護者となる。彼との生活が、後に「彗星物語」となる。【「ハンガリー人の息子」「ハンガリーの夏」「ハンガリー人の息子」「『夢見通りの人々』『葡萄と郷愁』」（『血』）】
・六月、「異国の窓から」連載開始（「CLASSY」1987年8月号まで）
・書評：【「清潔な蠱惑―黒井千次『春の道標』」（『血』）】

1985年　昭和六十年　38歳
・五月、「葡萄と郷愁」連載開始（「JJ」1986年5月号まで）
・七月、「花の降る午後」連載開始（「新潟日報」ほか。1986年3月まで）【「『花の降る午後』」（『血』）】
・同月、サイン会の開催。【「『流転の海』第二部について」（『血』）】
・軽井沢で知人から日本酒をもらう。【「酒と酒器」（『生』）】
・アルバイト女性のこと。【「音をたてて崩れる」（『血』）】
・日航機墜落事故について。【「乗り物嫌いの旅行好き」（『血』）】
・この頃からエッセーを書かなくなる。【「エッセー」（『血』）】
・書評：【「島崎藤村「夜明け前」」（『本』）】

1986年　昭和六十一年　39歳
・二月、文藝春秋連載小説のため、タイへ取材旅行。のちに「愉楽の園」となる。
・二月頃、宮尾登美子氏と対談。【「ディテールと底力―宮尾登美子」（『血』）】
・五月、「愉楽の園」連載開始（「文藝春秋」1988年3月号まで）【「『愉楽の園』」（『血』）】
・同月、「来世への階段」連載開始（「月刊カドカワ」1990年4月号まで。単行本化に際して「海辺の扉」と改題）【「『海辺の扉』」（『血』）】
・十月、ドイツ、ハンガリー、オーストリアへ取材旅行。【「ドナウの旅ふたたび〈三通の手紙〉」（『異』）】
・同月、日中文化交流協会の日本作家代表団として2度目の中国訪問。【「老舎「茶館」」（『本』）、『ひ』⑤第15章、「手品の鯉―中国再訪」（『血』）、「2011/04/28〈木〉02:42」「2011/05/06〈金〉02:51」「2011/05/14〈土〉02:30」（『真』）】
・マルセ太郎氏と対談。【「映画を演じる　その危険な芸―マルセ太郎」（『血』）】

1987年　昭和六十二年　40歳
・二月、「螢川」が須川栄三監督により映画化。
・三月、「優駿」で吉川英治文学賞を受賞。【「競馬にもっとロマンを」「わが幻の優駿よ―ぽろっと落ちた桜花賞」（『血』）】
・六月、タイを再訪。『五千回の生死』（新潮社）
・夏頃、香港で買い物。【「財布のひも」（『血』）】
・九月、「オレンジの壺」連載開始（「CLASSY」1992年3月号まで）
・アルバイト女性のこと。【「音をたてて崩れる」（『血』）】
・北海道訪問。【「春の牧場」（『血』）】
・書評：【「縁とロマン―黒井千次『眠れる霧に』」（『血』）】

1988年　昭和六十三年　41歳
・三島由紀夫賞の選考委員となる。（2007年まで）

・一月、「海岸列車」連載開始（「毎日新聞」1989年2月まで）【「海岸列車の鉄路」「『海岸列車』」（『血』）】
・七月、「優駿」が杉田成道監督により映画化。
・九月、東ドイツ、ポルトガル、スペイン、トルコ取材旅行。このポルトガル取材がのちに「ここに地終わり海始まる」となる。
・軽井沢の別荘が完成。【「軽井沢の仕事場」（『生』）】

1989年　平成元年　42歳
・一月、「彗星物語」連載開始（「家の光」1992年1月号まで）
・七月、ドイツ・ハンガリーへ旅行。【「ハンガリーの夏」「ハンガリー紀行」（『血』）】
・八月、「夢見通りの人々」が森崎東監督により映画化。
・十月、「花の降る午後」が大森一樹監督により映画化。

1990年　平成二年　43歳
・一月、「地の星」（流転の海　第二部）連載開始（「新潮」1992年9月号まで）
・同月、「本を積んだ小舟」連載開始（「THE　GOLD」1992年11月号まで）
・三月、「ここに地終わり　海始まる」連載開始（「福島民友」ほか。同年11月まで）
・同月、『真夏の犬』（文藝春秋）
・十一月、「流転の海」が斎藤武市監督により映画化。
・十二月、井上靖氏と対談。（翌年1月、井上氏逝去）【「ついに書かれなかった小説」（『血』）、「2011/05/15〈日〉02：55」（『真』）】

1991年　平成三年　44歳
・一月、『海辺の扉』（角川書店）
・九月、アラスカ取材旅行。写真家の故・星野道夫とデナリを旅する。【『ひ』③第9章、「2011/05/30〈月〉02：34」（『真』）】
・十月、母・雪恵、死去（享年79歳）。【「軽井沢の仕事場」「大晦日の書斎」（『生』）、「蜜柑山からの海」（『い』）】
・井上靖氏追悼。【「その偉大な質と量」（『血』）】

1992年　平成四年　45歳
・四月、『宮本輝全集』（新潮社）刊行開始（翌年完結）。【「書斎、大好き」「ころの形―望月通陽」（『血』）】
・すばる文学賞の選考委員となる。（1996年まで）北日本文学賞選考委員に就任。（継続中）
・六月、アラスカ再訪。
・九月、「私たちがすきだったこと」連載開始（「小説新潮」1995年8月号まで）
・同月、「朝の歓び」連載開始（「日本経済新聞」1993年10月まで）【「火花と炎」（『血』）】
・十月、「焚火の終わり」連載開始（「すばる」1996年10月号まで）
・絵具のこと。【「絵具」（『生』）】
・この頃、ゴルフを始める。【「ゴルフ道具」（『生』）】
・ハンガリー訪問。【「ハンガリー紀行」（『血』）】
・中上健次氏追悼。【「喪失」（『血』）】
・兄のこと。【「兄」（『い』）】

1993年　平成五年　46歳
・一月、「血脈の火」（流転の海　第三部）連載開始（「新潮」1996年2月号まで）

1994年　平成六年　47歳
・五月、「人間の幸福」連載開始（「産経新聞」1995年1月まで）
・七月、アラスカへ3度目の取材旅行。
・マックについて。【「早射ちマックも歳を取った」（『血』）】
・書評：【「シンプルであることの猥雑―山田詠美『トラッシュ』」（『血』）】

1995年　平成七年　48歳

・一月十七日、阪神淡路大震災で自宅が壊滅。【「平成七年一月十七日からの日記」（『生』）、「旅の始まりに」『ひ』①、「河原の死体」「人生のポケット」（『血』）、「2011/03/23〈水〉01:40」（『真』）、「人々のつながり」（『い』）】
・「月光の東」連載開始（「中央公論」1997年11月号まで）
・五月、シルクロード取材旅行。中国からパキスタンまで六七〇〇km横断（約四十日）。この取材が後に『ひとたびはポプラに臥す』（全6巻）となる。【『ひ』第1章、「2011/05/04〈水〉02:36」（『真』）、「星雲」「小説の登場人物たち」「世界、時間、距離」（『い』）】
・七月、「森のなかの海」連載開始（「VERY」2001年3月号まで）
・九月、「幻の光」が是枝裕和監督により映画化。
・十月、「ひとたびはポプラに臥す」連載開始（「北日本新聞」1999年11月まで）
・書評：【「一九九五年の焦土を書き残す―田辺聖子『ナンギやけれど……わたしの震災記』」（『血』）】

1996年　平成八年　49歳

・芥川賞の選考委員となる。（継続中）
・四月、伊丹市梅ノ木に転居。
・六月、『胸の香り』（文藝春秋）

1997年　平成九年　50歳

・一月、「睡蓮の長いまどろみ」連載開始（「文學界」2000年7月号まで）
・九月、「私たちが好きだったこと」が松岡錠司監督により映画化。
・十二月、「草原の椅子」連載開始（「毎日新聞」1998年12月まで）
・「播半」を訪問。【「橋の上で尻もち」（『血』）】

1998年　平成十年　51歳

・二月、「星宿海への道」連載開始（「星星峡」2002年4月号まで）
・軽井沢での記録。【「軽井沢日記」（『血』）】
・十月、初のアンソロジー『わかれの船』（光文社）

1999年　平成十一年　52歳

・この頃、パソコンを始める。【「人は言葉の生き物」（『血』）】
・四月、「天の夜曲」（流転の海　第四部）連載開始（「新潮臨時増刊号」。「新潮」2002年4月号まで）
・九月、愛犬〝マック〟死去（享年18歳）。
・セルダヘイ・イシュトバーン、駐日ハンガリー特命全権大使として日本に赴任。

2000年　平成十二年　53歳

・十月、「約束の冬」連載開始（「産経新聞」2001年10月まで）
・書評：【「知力の調べ―小林秀雄全集」（『血』）】

2002年　平成十四年　55歳

・「ウーマンズ・ビート」大賞選考委員に就任。（2004年まで）
・児玉清氏との対談。【「2011/06/17〈金〉02:18」（『真』）】

2003年　平成十五年　56歳

・二月、台湾へ取材旅行。体調を崩し、約一年間休養。

2004年　平成十六年　57歳

・三月、「約束の冬」で第54回芸術選奨文部科学大臣賞文学部門を受賞。
・五月、「にぎやかな天地」連載開始（「読売新聞」2005年7月まで）
・六月、「花の回廊」（流転の海　第五部）連載開始（「新潮」2007年4月号まで）
・十二月、アンソロジー『魂がふるえるとき―心に残る物語　日本文学秀作選』（文藝春秋）

2005年　平成十七年　58歳

・五月、追手門学院大学附属図書館に「宮本輝ミュージアム」開設。

2006年　平成十八年　59歳

・三好達治賞選考委員に就任。（2008年第3回まで）
・四月、「三千枚の金貨」連載開始（「BRIO」2009年8月号まで）
・五月、追手門学院大学にて、大学創立40周年と「宮本輝ミュージアム」開設一周年を記念して小栗康平と対談。
・六月、「骸骨ビルの庭」連載開始（「群像」2009年2月号まで）

2007年　平成十九年　60歳

・二月、『はじめての文学　宮本輝』（文藝春秋）
・七月、「錦繡」がジョン・ケアードの演出で舞台化。
・軽井沢での体験。【「風の渦」（『い』）】
・十月、「水のかたち」連載開始（「e`clat」2012年7月号まで）【「人々のつながり」（『い』）】
・十一月、『宮本輝全短編』（上下）（集英社）

2008年　平成二十年　61歳

・一月、NHK教育テレビ「知るを楽しむ―人生の歩き方」（全4回放送）
・十月、日本作家訪中団の団長として、中国を再訪。

2009年　平成二十一年　62歳

・七月、「慈雨の音」（流転の海　第六部）連載開始（「新潮」2011年6月号まで）
・十一月、「錦繡」がジョン・ケアードの演出で舞台再演。

2010年　平成二十二年　63歳

・一月、「三十光年の星たち」連載開始（「毎日新聞」2010年12月まで）
・二月、「骸骨ビルの庭」で第13回司馬遼太郎賞受賞。
・十一月、秋の褒章で紫綬褒章受章。
・自身の著述について。【「小説の登場人物たち」（『い』）】

2011年　平成二十三年　64歳

・五月、特別誂えの原稿用紙完成。【「2011/05/22〈日〉02:24」「2011/05/25〈水〉12:23」（『真』）】
・六月、『泥の河』舞台に文学碑建立。【「2011/06/06〈月〉02:28」（『真』）】
・同月、「骸骨ビルの庭」が舞台化。【「2011/06/23〈木〉01:45」「2011/06/24〈金〉01:27」（『真』）】
・常備薬について。【「パニック障害がもたらしたもの」（『い』）】

2012年　平成二十四年　65歳

・一月、「満月の星」（流転の海　第七部）連載開始（「新潮」2013年12月号まで）
・同月、「田園発 港行き自転車」連載開始（「北日本新聞」2014年11月まで）【「田園の光」（『い』）】

2013年　平成二十五年　66歳

・二月、「草原の椅子」が成島出監督により映画化。

2014年　平成二十六年　67歳

・北日本新聞文化賞受賞。
・六月、「長流の畔」（流転の海　第八部）連載開始（「新潮」2016年4月号まで）
・十二月、『いのちの姿』（集英社）

2015年　平成二十七年　68歳

・渡辺淳一文学賞選考委員に就任。（継続中）
・三月、「草花たちの静かな誓い」連載開始（「四国新聞」ほか。2015年12月まで）
・四月、「潮音」連載開始（「文學界」）【「そんなつもりでは……」（『い』）】

・十月、『人生のみちしるべ』（集英社）

2016年　平成二十八年　69歳

・五月、追手門学院名誉フェロー授与。
・十月、「野の春」（流転の海　第九部）連載開始（「新潮」）

2017年　平成二十九年　70歳

・十月十四日、高志の国文学館にて開館5周年記念特別展「宮本　輝――人間のあたたかさと、生きる勇気と。」開催。

※その他　人生論・文学論等

・「人は、生まれながらに差がついている」【「宿命という名の物語」（『二』）】
・「どんな人と出会うかは、その人の命の器次第」【「命の器」（『命』）】
・「目が心の窓だとすれば、口は心の玄関」【「貧しい口元」（『命』）】
・「私たちはどうして小説など読むのか」【「成長しつづけた作家」（『命』）】
・「坂上楠生の絵」【「坂上楠生さんの新しさ」（『命』）】
・「未来は若者に託すしかないのだが、そのためにこそ、我々おとなたちが、みずからの心根を磨かなければならない」【「心根の変化」（『血』）】
・「いなかもの」【「嫌いなもの」（『血』）】
・「私は短篇小説が好き」【「短篇小説」（『血』）】
・「いいエッセーが書けたら、小説家は一人前だ」【「エッセー」（『血』）】

注

（1）随筆集未収録の随筆も多くあるが、便宜上作業対象を上記九冊所収のものに絞り整理し、随筆で取り上げられている素材について、その傾向を見ようとした。なお、『異国の窓から』『ひとたびはポプラに臥す』は、それぞれヨーロッパ、シルクロードの旅の紀行文であるが、随筆の一種として作業対象とした。

（2）これまでに二瓶浩明編『近代文学書誌大系2　宮本輝書誌』（和泉書院、一九九二年）所収の「年譜」や、「宮本輝　新潮四月臨時増刊」（新潮社、一九九九年）所収の「年譜　宮本　輝による〈宮本　輝〉」で、一部の随筆を年譜上に位置づける試みがなされており、本稿執筆にあたり、参考とした。

（3）主に『二十歳の火影』『命の器』『血の騒ぎを聴け』所収の随筆で該当するものを、取り上げられた題材・テーマとともに並べた。

Ⅲ　〔企画展概要〕

（1）企画展「面白い箱！アニメづくりのスタジオの中へ」　大川原竜一

（2）企画展「浅野総一郎 ― 九転十起の生涯」　菅田　智雄

（3）企画展「知られざる 作家の世界　―書簡から直筆原稿、書画まで」　綿引　香織

（4）企画展　大伴家持生誕１３００年記念企画展

「官人　大伴家持―困難な時代を生きた良心」　大川原竜一

（1）企画展

「面白い箱！アニメづくりのスタジオの中へ」

大川原　竜一

アニメーションなどの映像制作の業界では、作品が完成した時に制作に携わったスタッフに配られる公開前のビデオテープなどのメディアを、白いケースに入れたことから、「白箱」（しろばこ）と呼んでいる。本企画展のタイトルには、アニメーションをめぐるたくさんの「面白い」が詰まったいわば「面『白』い『箱』」のようになればという期待がこめられている。

本展は、作品が生まれるまでの過程とその舞台裏であるアニメーションづくりの現場を取り上げ、アニメーションづくりの世界を知ってもらうとともに、そこにこめられた情熱とワクワク感を観覧者に伝えるべく企画された。さらに、アニメーションと地域の関わりも紹介し、地域に根づきアニメーションを描き続ける意味やそれが地域に果たす役割を探ることを目指した。

今回は、展示が親しみやすい内容となるよう、アニメーション制作会社「株式会社ピーエーワークス」に特別協力をいただき、富山を舞台としたアニメを中心とする構成とした。また、一般社団法人日本アニメーター・演出協会と一般社団法人日本動画協会よりご後援を賜った。企画にあたっては、一般社団法人地域発新力研究支援センターＰＡＲＵＳにご協力をいただいた。

展示の構成は以下のとおりである。

企画展示室の外に、アニメ『万能野菜ニンニンマン』のキャラクタースタンディや、アニメーション業界を描いた作品『ＳＨＩＲＯＢＡＫＯ』のキャラクターのデジタルサイネージを設置し、観覧者を出迎える導入展示とした。また、日本動画協会のご協力により、アニメ作品のタイトル年表および手塚プロダクションの『アストロボーイ・鉄腕アトム』のセル画を借用・展示し、アニメーションの歴史を紹介するとともに、かつてのアニメーションづくりと今のそれとの違いを強調してみせることができた。

企画展示室においては、アニメーションづくりの現場であるスタジオを再現し、作品が生まれるまでの工程をたどることで、観覧者が楽しみながら今のアニメ制作の舞台裏を知り、アニメーションづくりの世界を味わうことができるように工夫した。その一環としてピーエーワークスの作業現場の映像を流して、臨場感を演出した。

展示会場中央では、「アニメの作り方」というテーマで、企画からシナリオ、キャラクターデザイン、絵コンテなどの11のセクションを設定し、実際に現場で使っている作業机などをもちいセクションごとにわけて、それらの作業の様子を再現展示した。各セクションでは、作業の内容をキャラクターの芝居仕立てによるパネル展示で紹介し、観覧者がそれらをめぐることで、アニメーションができるまでの工程を歩いて体感できるようにした。それぞれの机の上には、企画書やシナリオ、キャラクターデザインにかかる設定資料、原画・動画用紙、作画用のペンや鉛筆など、現場で使用されている作業道具の実物や成果物を展示した。また作業の内容が詳しく分かるように、各セクションにモニターを設置して、作業風景の映像を流した。さらにアフレコ・ダビングのセクションでは、画面にあわせて声を吹き込む声優にチャレンジすることができる仕掛けをつくった。

会場奥の「アニメのできるまで」のコーナーには、絵コンテ段階の線画が原画、動画、彩色を経て、最終的に声がつき完成映像へと、次第にできあがっていく様子を視覚的に紹介するため、当館オリジナルアニメ『アニメ　マイの越中万葉体験記』の一つの場面を作業ごとにモニターに映し出した。これによりアニメーションは、シナリオや絵、音楽、声など多様な芸術が融合してできていることが説明できた。

また「アニメ紹介」のコーナーでは、様々な作業工程を経て完成した「作品」として、富山県が毎月第3日曜日と定めている「とやま県民家庭の日」を描いた作品『マイの魔法と家庭の日』をはじめ、『クロムクロ』や『ｔｒｕｅ　ｔｅａｒｓ』、『恋旅』という、富山を舞台やモチーフにして描かれたアニメーション作品を展示した。作品パネルや映像のほか、実際に使用された台本や完パケのビデオテープなど、普段はみることができない貴重な資料を展示するとともに、舞台モデルとなった地域の伝統や文化などを丁寧に表

現する、アニメーションと地域の関わりや新たな観光モデルについて紹介した。さらにここでは、高オタクラフト実行委員会が製作した高岡銅器製の「クロムクロ」胸像などを期間限定で展示した。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
パネル	『万能野菜ニンニンマン』ニンニンマン スタンディ	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
映像・動画	『ＳＨＩＲＯＢＡＫＯ』宮森あおい デジタルサイネージ	製作：ＰＡＲＵＳ	平成28年（2016）	ＰＡＲＵＳ
映像・動画	アニメ作品のタイトル年表	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	データ提供：日本動画協会
絵画	セル画『アストロボーイ・鉄腕アトム』	手塚プロダクション	—	手塚プロダクション
パネル	『ＳＨＩＲＯＢＡＫＯ』宮森あおい・ミムジー・ロロ スタンディ	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
印刷物	『アニメ　マイの越中万葉体験記』企画書、シナリオ	ピーエーワークス	—	ピーエーワークス
印刷物	『アニメ　マイの越中万葉体験記』キャラクターデザイン設定画、絵コンテ、動画、色彩設計、場面写	ピーエーワークス	—	ピーエーワークス
印刷物	ピーエーワークスオリジナルアニメーション原画用紙	ピーエーワークス	—	ピーエーワークス
パネル	『ｔｒｕｅ ｔｅａｒｓ』石動乃絵 スタンディ	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
印刷物	『ｔｒｕｅ ｔｅａｒｓ』ポスター	ピーエーワークス	平成20年（2008）	ピーエーワークス
パネル	『マイの魔法と家庭の日』立海マイ スタンディ	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
印刷物	『マイの魔法と家庭の日』ポスター	ピーエーワークス	平成23年（2011）	ピーエーワークス
映像・動画	『マイの魔法と家庭の日』ＤＶＤ	ピーエーワークス	平成23年（2011）	ピーエーワークス

アニメーションづくりの工程をたどった最後には、「アニメを作ろう」と題して、数枚の絵に色を塗ることで、その場でキャラクターを動かすことができる作画体験のコーナーをもうけ、観覧者に楽しんでいただいた。

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
映像・動画	『アニメ　マイの越中万葉体験記』ＤＶＤ	ピーエーワークス	平成24年（2012）	当館
印刷物	『アニメ　マイの越中万葉体験記』台本	ピーエーワークス	平成24年（2012）	ピーエーワークス
映像・動画	『アニメ　マイの越中万葉体験記』ＢＨＳ	ピーエーワークス	平成24年（2012）	当館
パネル	『恋旅』新藤葵 スタンディ	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
印刷物	『恋旅』ポスター	ピーエーワークス	平成25年（2013）	ピーエーワークス
パネル	『クロムクロ』白羽由希奈 スタンディ	製作：ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
印刷物	『クロムクロ』ポスター	ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
立体物	高岡銅器製「クロムクロ」胸像	製作：高オタクラフト実行委員会	平成28年（2016）	高オタクラフト実行委員会
印刷物	『クロムクロ』絵コンテ・原画・動画・場面写	ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
絵画	『クロムクロ』「黒鷲谷鬼縁起繪説圖」原画	ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス
立体物	『クロムクロ』青馬剣之介の刀［復元］	ピーエーワークス	平成28年（2016）	ピーエーワークス

会場地図

出入口

動画作業のようす

1 企画

2 シナリオ

3 キャラクターデザイン

「面白い箱！アニメづくりのスタジオの中へ」へようこそ！
この展示会ではTVアニメ作品がどうやって作られているのか、その舞台裏をのぞくことができちゃいます！

アニメの作り方

9 オフライン編集

10 アフレコ・ダビング

11 オンライン編集・完成

アニメを作ってみよう！
描いた絵が画面で動くよ！

アニメを作ろう

アニメ紹介

マイの魔法と家庭の日

恋旅～True Tours Nanto

クロムクロ

撮影はできません（記念撮影ポイントのみ撮影OK）

れているものには触らないでください

ろうコーナーで描いた絵は持ち帰れます

「面白い箱！アニメづくりのスタジオの中へ」会場地図

（2）企画展
「浅野総一郎 ― 九転十起の生涯」

菅田　智雄

本展は、当館開館以来はじめて富山の生んだ「巨人」に焦点をあてた企画展で、その第一弾として、実業家・浅野総一郎を取り上げた。

その生きざまは大変ドラマチックなものであった。若くして大商人になることを夢見、多くの事業を手掛けるも、失敗。それでも、何度でも挑戦する不撓不屈（ふとうふくつ）の精神で、失敗のたびに立ち上がり、自分の信じる道を突き進んでいった。やがてセメント事業を足掛かりとして、海運業や炭鉱開発、水力発電、埋立事業などへと事業を展開し、一代で浅野財閥を築く大実業家へと躍進し、日本の近代化に大きな足跡を残した。

本展では、総一郎の生涯をたどりながら、何度失敗してもくじけないたくましさや、社会に役立つ領域にいち早く着目し、事業を展開していった卓越した先見性・行動力を、資料をとおして紹介した。また、総一郎の最大の理解者であり支援者であった渋沢栄一や安田善次郎との関わりから、浅野総一郎の人物像を浮き彫りにした。

展示は、「大商人への憧れ」から始まり、「人財育成への情熱」まで、六コーナーで構成した。

「大商人への憧れ」では、昭和初期に描かれたという書画「浅野総一郎一代記」をもとに、その生い立ちや、氷見時代に繰り返した事業の立ち上げと失敗の数々―「九転十起」のさまを紹介した。

「事業の鬼」では、総一郎が興した事業に焦点をあてた。総一郎七回忌の折に発行された浅野系企業のアルバム集『ALL　ASANO』や、「東洋汽船」設立当初に描かれたとされる「東洋汽船　扇型ポスター」、東京湾埋立事業がわかる「東京湾埋立株式会社埋立地並京浜運河埋立計画平面図」等を展示し、「札幌麦酒約定書」や南北石油会社の絵葉書などもあわせて出展し、総一郎の興した事業が多岐にわたることを示した。

「二大巨人との交わり」では、総一郎の最大の理解者であった実業家、渋沢栄一と安田善次郎との関わりに注目した。総一郎の晩年に、渋沢栄一主催で帝国ホテルにて開かれた午餐会の資料や、安田善次郎の直筆の日記を展示するなど、その交流のさまを解き明かし、親交の深さを浮き彫りにした。

「日本文化の粋を世界へ」では、総一郎が外国人客を接待するために建設した自宅兼迎賓館「紫雲閣」の天井に飾られた綴織原画「雲鶴」や「扇散らし日本名所之図」を壁面展示で再現し、総一郎のスケールの大きさと、海外に目を向け新しいことに着目した先進的な一面を紹介した。

「故郷への貢献」では、総一郎の富山への貢献となった「高伏運河建設構想」と「庄川水力発電事業」に関わる資料を展示した。前者は、小矢部川から伏木―高岡を結ぶ運河を建設しようという、結局計画倒れに終わった事業だが、その計画の全貌を「高岡大都市計画図」で窺うとともに、その構想が今日ある富岩運河の建設につながっていったことを、当時の新聞記事などを通して紹介した。後者については、当時「東洋一」と称された小牧ダム建設関連の写真資料をとおして総一郎が富山に残した足跡をたどった。

「人財育成への情熱」では、総一郎が勤労主義を中心においた教育体系（ゲーリー・システム）を導入して創立した「浅野綜合中学校」（現・学校法人 浅野学園）に関連する写真資料などを展示した。「九転十起」という総一郎の生き方をあらわす言葉が当該校の校訓となっていることや、「浅野魂」として今の子どもたちに受け継がれていることを紹介した。

「巨人」の生きざまは、まさにその卓抜した知見と志の高さにおいて、触れる者の心に訴えかけて、語り継がれるべき文学性を備えているといえる。その意味で、本展は、巨人・浅野総一郎の文学性を追求する企画展となった。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
胸像	「浅野総一郎像」	檜原北悠	平成15年（2003）	株式会社檜原ブロンズ彫刻
写真（パネル）	写真　浅野総一郎肖像	—	大正12年（1923）頃	浅野学園
写真（パネル）	書画「浅野総一郎一代記」（複製）	画：片山春帆 書：佐藤名川	昭和初期	個人
書（額装）	「努力　かせぐにおいつくびんぼうなし」（複製）	浅野総一郎	昭和4年（1929）5月31日	個人
書（額装）	「努力と度胸　かせぐにおいつくびんぼうなし」	浅野総一郎	昭和5年（1930）5月9日	個人
書（軸装）	「寿　福」	浅野総一郎・佐久	昭和2年（1927）以前	浅野学園
書籍	『日本財閥の解剖』	高橋亀吉	昭和5年（1930）	当館
書籍	『浅野総一郎伝』	北林惣吉	昭和5年（1930）	個人
書籍	『父の抱負』	浅野総一郎（泰治郎）	昭和6年（1931）	当館
書籍	『ひもかゞみ』	浅野泰治郎	昭和3年（1928）	個人
書籍	『女の一心　浅野翁夫人正伝』（再版）	北林惣吉	平成7年（1995）	当館
雑誌	『グラヒック』第3巻第18号	有楽社	明治44年（1911）	横浜みなと博物館
冊子	アルバム『ALL　ASANO』	浅野関係会社有志一同	昭和11年（1936）	浅野学園
複写物	札幌麦酒約定書（複製）	—	明治20年（1887）	サッポロビール博物館
絵画	「TOYOKISEN KAISHA THREE SISTER SHIPS」（東洋汽船　扇型ポスター）	東洋汽船	明治33年（1900）後半	日本郵船歴史博物館
書籍	『商船建造の歩み　1887-1958』	三菱造船株式会社	昭和34年（1959）	当館
冊子	「桑港航路　渡米の栞」	東洋汽船	大正2年（1913）	個人
冊子	「桑港航路案内」	東洋汽船	大正9年（1920）頃	横浜みなと博物館
冊子	「春洋丸　MAH-JONGG SCORE SHEET」	—	明治44年～大正15年（1911～1926）	日本郵船歴史博物館
絵葉書	東洋汽船　船内メニュー　朝食	—	大正12年（1923）	横浜みなと博物館
絵葉書	東洋汽船　船内メニュー　昼食	—	大正6年（1917）	横浜みなと博物館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
絵葉書	東洋汽船　船内メニュー　夕食	—	大正12年（1923）	横浜みなと博物館
絵葉書	南北石油会社	南北石油会社	明治41年（1908）頃	横浜開港資料館
絵葉書	南北石油会社横浜製油所	南北石油会社	明治41年（1908）頃	横浜開港資料館
絵葉書	浅野製鉄所開業記念絵葉書	浅野製鉄所	大正7年（1918）頃	横浜みなと博物館
絵葉書	浅野造船所　白鹿丸進水記念絵葉書	浅野造船所	大正6年（1917）	横浜みなと博物館
模型	イースタン・マーチャント号	—	大正6年（1917）頃	横浜みなと博物館
書籍	「東京湾埋立株式会社埋立地並京浜運河埋立計画平面図」（『東京湾埋立株式会社の事業と京浜運河の計画』より）	京浜運河株式会社	大正11年（1922）	横浜みなと博物館
立像	「九転十起の像」	—	平成20年（2008）	NPO法人九転十起交流会
写真（パネル）	写真　渋沢栄一肖像	—	明治42年（1909）	渋沢史料館
書籍	『浅野総一郎』（復刻版）	浅野泰治郎・良三	平成22年（2010）	当館
雑誌	『龍門雑誌』第426号	龍門社	大正13年（1924）	渋沢史料館
冊子	渋沢栄一の日記（写本）	渋沢栄一	大正14年（1925）以降	渋沢史料館
写真（パネル）	写真　実業之日本社三十周年記念晩餐会	—	昭和2年（1927）	渋沢史料館
雑誌	『東京経済雑誌』第60巻第1498号	東京経済雑誌社	明治42年（1909）7月	渋沢史料館
絵葉書	浅野総一郎氏寿像建設絵葉書	—	大正13年（1924）頃	横浜開港資料館
書籍	『浅野総一郎翁寿像建設の経緯』	橋本梅太郎	昭和10年（1935）	浅野学園
雑誌	『実業之日本』第29巻第4号	実業之日本社	大正15年（1926）2月	個人
写真（パネル）	写真　大礼記念帝室博物館復興翼賛会創立発起人会	—	昭和3年（1928）	渋沢史料館
手稿	帝国ホテルにおける午餐会出席者名簿	—	昭和5年（1930）	渋沢史料館
手紙	帝国ホテルにおける午餐会招待に対する請書	浅野総一郎か	昭和5年（1930）	渋沢史料館
手稿	帝国ホテルにおける午餐会メニュー（日本語）	—	昭和5年（1930）	渋沢史料館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
雑誌	『龍門雑誌』第506号	龍門社	昭和5年（1930）	渋沢史料館
写真（パネル）	写真　安田善次郎肖像	—	大正初期	安田不動産
書籍	『凡人非凡人』	横山源之助	明治44年（1911）	当館
書籍	『安田善次郎伝』（復刻版）	矢野文雄	平成10年（1998）	当館
書籍	『富之礎』	安田善次郎	明治44年（1911）	当館
書籍	『松翁清話』	大谷勝太郎編	昭和18年（1943）	当館
写真（パネル）	写真　浅野セメント苅田原石採掘所視察記念	—	大正10年（1921）	みずほ銀行
冊子	安田保善社社史作成時資料　フィリピン旅行	安田保善社社史編纂室	昭和49年（1974）以前	安田不動産
冊子	安田保善社社史作成時資料　PHOTO　BOOK	安田保善社社史編纂室	昭和49年（1974）以前	安田不動産
冊子	『松翁手控』第17号	安田善次郎	明治29年（1896）	安田不動産
書籍	『明治三十八年当用日記』	安田善次郎	明治38年（1905）	安田不動産
書籍	『明治四十三年当用日記』	安田善次郎	明治43年（1910）	安田不動産
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　大文字に五条の橋	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　石山の月　和泉式部	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　木蓮　菖蒲　撫子	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　金閣寺　銀閣寺	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　祇園会	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　住吉神社　高燈籠	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　富士　武蔵野	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　磐城　乙寺瀧　陸前宮城のうづら	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　北海道小樽港の雪　白岳	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　厳島	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　三河の八橋　杜若　業平之古事四ツ菱	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　鳴門	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　和歌之浦　御あしに田霞	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　羽後　小町芍薬	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　耶馬溪	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　石室崎	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　伯耆　投入堂　青苔蔦	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　向島　春桜図　都鳥之模様　浅草と富士に向島より望む図	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　吉野　龍田	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　信濃　浅間山　田毎の月	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織格天井原画「扇散らし日本名所之図」　薩摩　桜島　吹上之濱	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
絵画	紫雲閣　綴織大廊下天井原画「雲鶴」（縮図）	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
絵画	紫雲閣　綴織格天井織下絵「草花模様」	神坂雪佳	明治42年（1909）以前	川島織物セルコン織物文化館
冊子	『紫雲閣説明書』	—	明治42年（1909）頃	浅野学園
写真	写真　浅野物産株式会社創立二十周年祝賀会記念撮影	—	昭和13年（1938）3月	浅野学園（我部正氏寄贈）
冊子	『紫雲閣写真帳』	—	昭和3年（1928）頃	当館
書籍	『川島家と其事業』	川島甚兵衛	昭和6年（1931）	川島織物セルコン織物文化館
書籍	日英博覧会図録『JAPAN　TODAY』	—	明治43年（1910）	川島織物セルコン織物文化館
写真	古写真「雲鶴」製織風景	—	明治36年（1903）頃	川島織物セルコン織物文化館
冊子	写真帳『清美帖』	—	明治42年（1909）頃	川島織物セルコン織物文化館
冊子	高級裂地見本帳	—	明治後期以降	川島織物セルコン織物文化館
食膳	浅野家膳セット	—	—	山崎健氏提供
絵図	高岡大都市計画図（GREAT TAKAOKA CITY MANAGE PLAIN）	T・KAWAI	大正12年（1923）	高岡市立博物館
記事	「北陸タイムス」大正7年9月27日記事（複製）	北陸タイムス社	大正7年（1918）	北日本新聞社提供
記事	「北陸タイムス」大正7年11月13日記事（複製）	北陸タイムス社	大正7年（1918）	北日本新聞社提供
写真	小牧ダム建設に関する写真集	—	大正～昭和初期	山崎健氏提供
写真	写真　建設中の小牧ダム（複製）	—	昭和5年（1930）以前	個人
写真	写真　小牧ダム工事現場を視察する総一郎（複製）	—	大正11年（1922）頃	個人
写真	写真　小牧ダム起工式に出席する総一郎（複製）	—	大正12年（1923）	山崎健氏提供
写真	写真　水力発電所建設予定地を調査する総一郎（『浅野総一郎』より）	—	大正11年（1922）	個人
看板（木製）	「浅野綜合中学校」	徳富蘇峰か	大正9年（1920）頃	浅野学園

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
模型	旧浅野邸模型	—	昭和22年（1947）以降	浅野学園
立体物	旧浅野邸ステンドガラス	—	昭和3年（1928）頃	浅野学園

（3）企画展

「知られざる 作家の世界　―書簡から直筆原稿、書画まで」

綿引　香織

この展覧会は、高志の国文学館で収蔵している資料だけで構成した、初めての収蔵資料展である。

開館四年目を迎える当館では、寄贈や購入などによる四万点を超える資料を収蔵しているが、通常の常設展や企画展で紹介できるのは、そのうちの限られた部分である。そこで今回の展示では、普段公開する機会が少ない資料を含めて、作家の原稿や手紙、書画、愛用品など一一九点を展示した。

原稿や手紙、直筆ノートなどは、作家の創作の内側をうかがうことができるものであり、色紙や短冊、書画、愛用品などは、作家の別の一面を見せてくれる資料でもある。これらの展示を通じて、誰もが耳にしたことのある文学者たち、郷土ゆかりの作家たちの人となりや作品世界をさらに深く知ることができたのではないかと考える。

展示エリアごとの内容は以下の通りである。

「1．文豪の直筆コレクション」のうち、近代文学作家の直筆資料を紹介するコーナーでは、幸田露伴、尾崎紅葉、室生犀星、泉鏡花、吉井勇、高浜虚子など、誰もが名前を知っている文豪による俳句・短歌の短冊コレクションを展示した。また、江戸川乱歩の原稿「私の蒐集癖」、水上勉の原稿「日本海辺を讃える」、横光利一が改造社の編集者にあてた書簡、中河与一の色紙などを展示した。

次のコーナーでは、歌人で翻訳家の片山廣子（松村みね子）が芥川龍之介あてに出した書簡および片山廣子の歌稿が巻子に装幀されている「書簡軸」を展示した。これは、大正十三年から十四年の間に出された書簡十四通と廣子の歌稿「追分のみち」から構成されている。片山廣子研究のうえでも、芥川龍之介研究のうえでも注目されてきた資料であるが、全文を公開するのは初めての機会であった。関連書として、片山廣子の第一歌集『翡翠』、松村みね子（片山廣子）訳『船長ブラスバオンドの改宗』、『明星』第六巻第三号（芥川龍之介の旋頭歌「越びと」掲載）、堀辰雄『聖家族』（片山廣子や芥川龍之介などが登場人物のモデルとなったと言われている）などを展示した。

「2．富山ゆかりの作家資料コレクション」のうち、作家の資料を紹介するコーナーでは、岩倉政治の色紙と原稿「憮然年令」、田中富雄（源氏鶏太）の自筆詩集と『北陸詩壇』掲載詩のスクラップノート、源氏鶏太の原稿「私とユーモア小説」、須山ユキヱの原稿「法悦」や愛用品、稲垣史生の原稿「浅尾」、堀田善衛の原稿「終戦と進駐軍」などを展示した。源氏鶏太の直筆詩集とスクラップノートは、昭和四年から五年にかけて作られたもので、サラリーマン小説で人気を博した作家が、若い頃に詩作に励んでいたことを示す好資料である。

詩人の資料を紹介するコーナーでは、田中冬二の色紙、高島高の詩稿「北の故郷」、萩野卓司の詩稿「熱い冬」、瀧口修造の原稿「身辺珍書」、稗田菫平の詩集稿本「氷河の爪」などを展示した。

歌人の資料を紹介するコーナーでは、渡辺順三の原稿「ある正月の思い出」、筏井嘉一の色紙、岩城正春の歌稿「歌集　稲供養」、小又幸井の原稿「亡き魂によせる」、高崎正秀の短歌色紙、大島文雄の原稿「若き日の歌」、大坪晶一の短歌草稿、辺見じゅんの色紙、岡部文夫の歌稿「月明」などを展示した。

俳人の資料を紹介するコーナーでは、山口花笠の短冊、澤田はぎ女の短冊、前田普羅の葉書、金尾梅の門の色紙、沢木欣一の原稿「即境俳句論」などを展示した。

「3．書画コレクション」では、芭蕉の句軸、与謝野晶子の短冊、若山牧水の短歌軸、岸田劉生の絵画「武者小路実篤像」、筏井竹の門の俳画軸「大牧温泉にて」、金尾梅の門の俳句軸、角川源義の俳句軸、翁久允の書画掛軸、郷倉千靱の屏風「花祭り」などを展示した。

本展は、高志の国文学館の多彩な収蔵資料について幅広く紹介する機会となった。紹介している作家七十一人のうち、富山出身・あるいは在住の作家は四十人にのぼり、富山を舞台にした作品を書いていたり、富山に来て短歌や俳句をよんでいたりする作家も七人いる。

また、日本近代文学の研究史上注目されてきた、片山廣子の芥川龍之介宛書簡を初めて全文公開した貴重な機会でもあった。なお、この展示に先立って発行された『高志の国文学館　紀要』第1号（平成二十九年一月十三日発行）において、書簡および歌稿の全文を注釈付きで翻刻紹介しているので、参照されたい。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
短冊	鶏頭や釘に掛けたる手水樽	尾崎紅葉	—	当館
短冊	春の鳥あけぼの楠をはなれたり	幸田露伴	—	当館
短冊	いづこよりのぼりて見んとまよふ迄　そめつくしたる峯のもみぢ葉	田山花袋	—	当館
短冊	岸行くや雫も切らす四千あみ	泉　鏡花	—	当館
短冊	太奏で提灯買ふやさくら狩	高浜虚子	—	当館
短冊	あかつきのねざめに雨のおとすなり　山のみてらの秋のふかきに	相馬御風	—	当館
短冊	河鹿啼くのみ　いと暗き夜を或る楼へ	荻原井泉水	—	当館
短冊	あきの風こよひのほそき月かげも　愁とならで君に吹けかし	柳原白蓮	—	当館
短冊	ゆるやかにだらりの帯のうごく時　はれがましやと君のいふとき	吉井　勇	—	当館
短冊	小夜ふけてゆにひたりきく谷川の　こゝろひとつに音まさりゆく	平塚らいてう	—	当館
短冊	蒲公英の灰あびしまま咲きにけり	室生犀星	—	当館
短冊	湯上りの爪剪る先や雲の峯	吉川英治	—	当館
短冊	垣間みて隣の春ぞ惜しまるる	佐藤春夫	—	当館
原稿	巨人露伴の片鱗	辰野　隆	昭和22年（1947）11月初出	当館
原稿	私の蒐集癖	江戸川乱歩	昭和28年（1953）	当館
原稿	美的精神の系譜	中河与一	—	当館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書簡	水島治男宛封書	横光利一	（年不明）9月10日	当館
書籍	紋章	横光利一	昭和9年（1934）9月21日	当館
色紙	美意延年	川端康成	昭和37年（1962）10月22日	当館
原稿	日本海辺を讃える	水上勉	昭和45年（1970）頃	当館
書籍	聖家族	堀　辰雄	昭和7年（1932）	当館
書籍	短篇集　物語の女	堀　辰雄	昭和9年（1934）	当館
書籍	室生犀星全集　第3巻	室生犀星	昭和41年（1966）	当館
書籍	船長ブラスバオンドの改宗	ショオ著、松村みね子（片山廣子）訳	大正4年（1915）	当館
書籍	歌集　翡翠	片山廣子	大正5年（1916）	当館
書籍	三幕喜劇　いたづらもの	シング著、松村みね子（片山廣子）訳	大正6年（1917）	当館
書籍	かなしき女王	フィオナ・マクロウド著、松村みね子（片山廣子）訳	大正14年（1925）	当館
書籍	カッパのクー―アイルランド伝説集―	オケリー他著、松村みね子（片山廣子）訳	昭和27年（1952）	当館
書籍	燈火節	片山廣子	昭和28年（1953）	当館
雑誌	明星　第6巻3号	與謝野寛編集兼発行	大正14年（1925）3月	当館
書籍	西方の人	芥川龍之介	昭和4年（1929）	当館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書簡	芥川龍之介宛書簡軸（1）	片山廣子	大正13年（1924）9月1日～同年9月25日	当館
書籍	大導寺信輔の半生	芥川龍之介	昭和5年（1930）	当館
書籍	燈火節	片山廣子	昭和28年（1953）	当館
書簡	芥川龍之介宛書簡軸（2）	片山廣子	大正13年（1924）10月31日～大正14年（1925）6月24日	当館
書籍	百艸	芥川龍之介	大正13年（1924）	当館
書籍	桔梗の風　天涯からの歌	辺見じゅん	平成24年（2012）	当館
書籍	ダンセニイ戯曲全集	松村みね子（片山廣子）訳	大正10年（1921）	当館
書簡、原稿	芥川龍之介宛書簡軸（3）付：歌稿「追分のみち」	片山廣子	大正14年（1925）8月30日～同年12月8日	当館
書籍	歌集　野に住みて	片山廣子	昭和29年（1954）	当館
原稿	憮然年令	岩倉政治	昭和48年（1973）3月初出	当館
色紙	遊煩悩林現神通	岩倉政治	平成2年（1990）10月10日	当館
色紙	芸術　愛のさまざまを描くもの　愛　それを生きて演ずるもの	池田源尚	—	当館
原稿	『岬の気』について	野村尚吾	（昭和17年7月初出か）	当館
ノート	『北陸詩壇』掲載詩スクラップノート	田中富雄（源氏鶏太）	昭和4年（1929）頃	当館
ノート	田中富雄詩集	田中富雄（源氏鶏太）	昭和5年（1930）	当館
雑誌	校友会誌（富山県立富山商業学校）45号	田中富雄（源氏鶏太）	昭和4年（1929）11月	当館
原稿	私とユーモア小説	源氏鶏太	昭和48年（1973）3月初出	当館
原稿	浅尾	稲垣史生	—	当館
写真	稲垣史生スナップ写真	—	—	当館
原稿	法悦	岩崎ユキヱ（須山ユキヱ）	昭和22年（1947）頃	当館
色紙	書くことは祈りの形式である	須山ユキヱ	—	当館
愛用品	落款印、干支印	須山ユキヱ	—	当館
愛用品	革製筆入れ	須山ユキヱ	—	当館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
原稿	終戦と進駐軍	堀田善衛	昭和27年（1952）	当館
色紙	花のいのち長かれ　傷をうくることなかれ	堀田善衛	—	当館
原稿	倶利伽羅の牛	能坂利雄	昭和50年（1975）2月初出	当館
原稿	現代儀式論	柏原兵三	昭和45年（1970）頃	当館
詩稿	草雨亭／富士ビューホテル／山宿	田中冬二	昭和41年（1966）頃	当館
色紙	山は父のようにきびしい　そしてまた母のようにやさしい…	田中冬二	—	当館
原稿	身辺珍書	瀧口修造	昭和36年（1961）3月初出	当館
詩稿	北の故郷	高島　高	—	当館
詩稿	雪明りのなかで／朝露のなかで	萩野卓司	昭和61年（1986）7月初出	当館
詩稿	抒情詩抄	萩野卓司	昭和57年（1982）6月初出	当館
原稿	『さるすべりの花と人魚』の詩人に寄せて	多胡羊歯	昭和33年（1958）3月初出	当館
稿本	氷河の爪	稗田菫平	昭和38年（1963）4月稿定	当館
一枚物（書）	竹林の藪に　山吹は咲き　黄金いろに　日は暮れんとす	稗田菫平	—	当館
原稿	ある正月の思い出	渡辺順三	昭和37年（1962）	当館
短冊	丘の木がしんとしづまり立ちゐるを　不思議のごとく吾は見てゐる	渡辺順三	—	当館
色紙	おもしろと古木の梅の枝ぶりを見惚るゝほどに花のかゞよふ	筏井嘉一	—	当館
短冊	灯をけせは二階の硝子いちめんの　寝待の月となりにけるかも	藻谷銀河	—	当館
稿本	歌集　稲供養	岩城正春	昭和34年（1959）12月20日	当館
色紙	立山をはなるゝ月のまとかにて　あし洗ふ馬もわれもかけ顕つ	岩城正春	—	当館
原稿	歌人　藻谷六郎	小又幸井	—	当館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
色紙	朱にしみあけにきわまり夕つく日大立山の峰々照らす	小又幸井	—	当館
色紙	たゝなはるやま青垣もかゞよひて　いまあらた代の朝あけきたる	髙崎正秀	昭和47年（1972）頃か	当館
絵葉書	呉羽山頂高崎博士歌碑落成記念葉書	—	—	当館
原稿	若き日の歌	大島文雄	—	当館
色紙	ひそかなる遠いなつまやさ夜ふかく　薬師の尾根の雪ひかりつゝ	大島文雄	—	当館
色紙	夜もふけぬ　河童絵巻の幻想の壁に消えゆき暗きかも灯は	大坪晶一（大坪丹魚洞）	—	当館
うちわ（書画）	朝餉まつ間を薬師堂にゆきてみつ　眼にしらじらと虎耳草の花	大坪晶一	—	当館
歌稿	陋巷浅春	木俣　修	—	当館
色紙	大連華の山々雪を荘厳す　ふるさとの秋深まりしかな	広川親義	—	当館
歌稿	月明	岡部文夫	昭和62年（1987）	当館
短冊	桜ばな含める宵となりにけりはなやかにして人なつかしき	岡部文夫	—	当館
色紙	立山の鼓動きこゆるおもひする　雪ふかぶかと天に顕つあさ	深山　榮	—	当館
色紙	歳月のかなた浄めて来しが雪	辺見じゅん	—	当館
色紙	黄昏の野より帰りておとうとの郁子の実ひとつこゑ持つごとし	辺見じゅん	—	当館
短冊	風立ちの月色となりし砧かな	志田素琴（義秀）	—	当館
短冊	砺波野の家ほつほつと花になり	山口花笠	—	当館
短冊	山々の河の流れ明けの春	中塚一碧楼	—	当館
短冊	そなさんと知っての雪の礫かな	澤田はぎ女	—	当館
書簡	下澤木鉢郎宛葉書	前田普羅	昭和15年（1940）11月21日消印	当館
書簡	下澤木鉢郎宛葉書	前田普羅	昭和16年（1941）8月18日消印	当館
色紙	雪山に雪のふり居る夕哉	前田普羅	—	当館
色紙	人形の雪うた見えてうらゝかに	中島杏子	—	当館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
原稿	即境俳句論	沢木欣一	昭和45年（1970）初出	当館
掛軸	俳諧小色紙	松尾芭蕉	元禄3年（1690）	当館
掛軸	宛名不明消息	良寛	（年不明）10月5日付	当館
掛軸	〔無花果会〕同人宛書簡	河東碧梧桐	明治40年（1907）11月1日	当館
短冊	越中五箇山中　筧またぎ行く里の金蓮花など	河東碧梧桐	—	当館
短冊	何となく君にまたるゝ心地して　出でし花野の夕月夜かな	与謝野晶子	—	当館
書籍	みだれ髪	与謝野晶子	明治34年（1901）	当館
掛軸	白玉の歯にしみとほる秋の夜の　酒は静かに飲んべかりけり	若山牧水	大正7年（1918）5月	当館
掛軸	ゆふされば大根の葉にふるしぐれ　いたく寂しくふりにけるかも	斎藤茂吉	—	当館
書籍	あらたま	斎藤茂吉	大正10年（1921）	当館
色紙	まさをなる空よりしだれざくらかな	富安風生	—	当館
絵画	武者小路実篤像	岸田劉生	大正8年（1919）3月27日	当館
短冊	蛍かと思ったら星だった雲のさけめ	武者小路実篤	—	当館
掛軸	大牧温泉にて	筏井竹の門	大正時代	当館
掛軸	普明照世間	翁　久允	昭和43年（1968）	当館
一枚物	賀正	翁　久允	昭和21年（1946）元旦	当館
掛軸	しらきくに恍惚と藁かゝりけり	金尾梅の門	—	当館
書籍	句集　蔦	金尾梅の門	昭和46年（1971）	当館
色紙	はだら野や満月をとぶゆふがらす	金尾梅の門	—	当館
掛軸	妻恋へば七月の野に水の音	角川源義	—	当館
書籍	句集　ロダンの首	角川源義	昭和31年（1956）	当館
色紙	秋風の越後にとなる一茶の地	角川源義	—	当館
屏風（六曲一双）	花祭り	郷倉千靭	大正時代	当館

（4）企画展
大伴家持生誕1300年記念企画展
「官人（つかさびと）　大伴家持―困難な時代を生きた良心」

大川原　竜一

本展は、大伴家持生誕1300年を記念して、3回シリーズで開催する記念企画展の第一弾である。

大伴家持は、かつて奈良に都のあった時代に、伝統ある貴族の嫡流にうまれた。大伴氏は天皇の護衛にあたり活躍した祖先伝承をもっており、家持は、名門貴族の嫡流としての自負と武門の伝統を意識しつづけたといわれる。彼自身は、現存する最古の歌集『万葉集』の編纂に関わったとされ、奈良時代を代表する歌人であると同時に、他の貴族とともに政治に携わり、波乱の歴史を生きぬいた一人の官人であった。

家持は、都での少納言、中納言などのみならず、越中守、因幡守、大宰少弐、伊勢守、陸奥按察使鎮守将軍などの官職を歴任し、政治や文化の発展に貢献した。そのような彼の業績を多くの方に知ってもらうため、北は宮城県から南は福岡県まで、家持が赴任した地にある博物館等が所蔵する貴重な資料を一堂に展示し、困難な時代を懸命に生きた良心の叫びともいえる数々の歌をまじえながら、官人としての仕事から彼の人物像に迫った。家持が生きた奈良時代を背景に、武門の嫡流にうまれた彼が官人としての役目を果たしながら、どんなことに直面して成長し生きたか、その境涯と生き方を紐解いた。

第1部「内舎人として―異国文化の中での成長と天皇に近侍する誇り」では、幼少期に海外の先進文化にふれながら父とともにすごした大宰府跡の資料を九州歴史資料館より、また天皇の住まいである平城宮跡や、聖武天皇の東国行幸に従駕した際の恭仁宮跡の資料を奈良文化財研究所や京都府立山城郷土資料館よりそれぞれ借用し、家持の少年時代と、エリートとして朝廷へ出仕した青年時代を紹介した。また、三十六歌仙の一人として、百人一首においても「中納言家持」の名で語り継がれる家持について、観覧者にイメージ豊かにとらえて知ってもらうため、現代作家による絵画資料（奈良県立万葉文化館所蔵）や、近世に描かれた「三十六歌仙図絵巻」「三十六歌仙図画帖」（斎宮歴史博物館所蔵）を、会期をわけて展示した。

第2部「国司として―新たな風土への驚きと民に接するよろこび」においては、家持が越中をはじめ因幡、伊勢などに派遣され職務に従事した時代をとりあげた。地方の政務をつかさどった国司の仕事や家持の赴任地での様子について、当時の法制資料や復元した国司の衣装、越中国府跡・伊勢国府跡の考古資料などを、富山市立図書館および高岡市教育委員会、高岡市万葉歴史館、鈴鹿市考古博物館より借用し、詳しくみていった。さらにここでは、家持が国司として国内を巡行する職務を行っていたこと、また中央の貴族や寺院の荘園の設定や開墾に彼が関わっていたことを解説するため、富山県埋蔵文化財センター所蔵の出挙木簡や、南砺市埋蔵文化財センターが所蔵する高瀬遺跡から出土した考古遺物を展示した。

第3部「武門の人として―官人としての苦悩」では、名門貴族の嫡流としての自負と武門の伝統を意識しつづけた家持について、多賀城跡などの資料などをもちいて解き明かした。家族や故郷への思いを犠牲にして天皇に仕える防人の勇姿を描いた、大亦観風の「萬葉集畫撰」の絵画資料や、新羅との緊張状態がつづくなか防衛施設であった大宰府を物語る考古資料、また、東北歴史博物館および宮城県多賀城跡調査研究所より、蝦夷とよばれた人々との武力衝突がくりかえされた当時の多賀城を知ることができる考古遺物や宮城県指定文化財の兵士木簡をそれぞれ借用し、武門の一族の名にかけて天皇への一層の奉仕を誓う家持の心を紹介した。

また、企画展示室外のギャラリーにおいては、マンガ家の里中満智子先生の『天上の虹　持統天皇物語』や現在執筆中の『言霊の人　大伴家持物語』の「原画」を展示し、本展を華やかに彩ることができた。

会期中には、家持の筆跡が残る奈良時代の公文書「太政官符」（文化庁保管）と、家持が越中に赴任した年が記された木簡（奈良文化財研究所所蔵。平成29年3月10日に国の文化審議会にて国宝指定に向けた答申がなされ、9月15日付けの官報告示により国宝に昇格）という、二つの重要文化財を出展することができ、当館で初めて重要文化財を受け入れて公開するという貴重な体

験が得られた展覧会となった。

本展は、平成29年5月に全国植樹祭でご来県された天皇皇后両陛下にご覧いただける栄誉に浴した。

なお本企画展では、大伴家持ゆかりの、九州歴史資料館、斎宮歴史博物館、高岡市万葉歴史館、東北歴史博物館、鳥取市因幡万葉歴史館、奈良県立万葉文化館、わくや万葉の里 天平ろまん館と連携し、展示資料の借用や図録への寄稿等、多大なご協力を賜った。記して深く感謝を申しあげる。

□導入展示

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
絵画	原画「大伴家持」（『言霊の人 大伴家持物語』より）ほか1点	里中満智子	平成29年（2017）ほか	里中プロダクション
立体物	万葉風衣装	高岡万葉まつり実行委員会	現代	高岡万葉まつり実行委員会

□企画展示室

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
パネル（写真）	「東大寺大仏殿落慶法要」	入江泰吉	昭和55年（1980）	画像提供：入江泰吉記念 奈良市写真美術館
パネル（写真）	「平城京［復元模型］」	奈良市役所	現代	画像提供：奈良市役所
古文書	太政官符（宝亀三年五月廿日／大伴家持自署）	—	宝亀3年（772）重要文化財	国（文化庁保管）

□第1部　内舎人として―異国文化の中での成長と天皇に近侍する誇り

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
絵画	「大伴家持」	大山忠作	平成10年（1998）	奈良県立万葉文化館
絵画	『鷹狩』	折井宏光	平成8年（1996）	奈良県立万葉文化館
絵画・書蹟	『佐竹本三十六歌仙図絵巻』模本	田中親美	大正11年（1922）原品：鎌倉時代（13世紀）	斎宮歴史博物館
絵画・書蹟	『佐竹本三十六歌仙図絵巻』模本	不明	江戸時代後期 原品：鎌倉時代（13世紀）	斎宮歴史博物館
絵画・書蹟	『時代不同歌合絵』	藤原頼直	江戸時代	斎宮歴史博物館
絵画・書蹟	『三十六歌仙図画帖』	住吉具慶	江戸時代前期（17世紀後半）	斎宮歴史博物館
絵画・書蹟	『三十六歌仙図画帖』	土佐慶琢	江戸時代前期（17世紀末～18世紀前半）	斎宮歴史博物館
絵画・書蹟	『三十六歌仙図画帖』	狩野常信	江戸時代前期（17世紀末～18世紀初頭）	斎宮歴史博物館
考古資料	大宰府跡出土　政庁Ⅱ期軒瓦	—	奈良時代（8世紀前半）	九州歴史資料館
考古資料	大宰府学校院跡出土　文様塼（長方形、三角形）	—	奈良時代（8世紀後半）	九州歴史資料館
考古資料	大野城跡出土　鬼面文鬼瓦	—	奈良時代（8世紀）	九州歴史資料館
考古資料	大宰府政庁周辺官衙跡出土　唐三彩陶枕	—	唐・8世紀	九州歴史資料館
工芸品	唐三彩陶枕［復元］	九州歴史資料館	現代	九州歴史資料館
考古資料	福岡市中央区大濠採集　新羅土器　蓋	—	統一新羅・8世紀	九州歴史資料館
考古資料	大宰府政庁周辺官衙跡出土　佐波理箸	—	奈良時代（8世紀）	九州歴史資料館
考古資料	大宰府政庁周辺官衙跡出土　越州窯系青磁四耳壺	—	唐・8世紀	九州歴史資料館
考古資料	観世音寺出土　白玉製腰帯具（鉈尾）	—	平安時代	九州歴史資料館
パネル（写真）	「平城宮跡出土　木簡［内舎人大伴□］」	—	原品：奈良時代前半	画像提供：奈良文化財研究所

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
考古資料	平城宮跡出土　墨書土器「内舎人」	—	奈良時代	奈良文化財研究所
考古資料	平城宮跡出土　第一次大極殿軒瓦	—	奈良時代（8世紀前半）	奈良文化財研究所
考古資料	平城宮跡出土　第二次大極殿軒瓦	—	奈良時代（8世紀後半）	奈良文化財研究所
考古資料	平城宮跡出土　鬼面文鬼瓦	—	奈良時代（8世紀）	奈良文化財研究所
パネル（写真）	「平城宮跡出土　木簡「大伴門」」	—	原品：奈良時代	画像提供：奈良文化財研究所
書籍・典籍	明暦三年版『続日本紀』	立野春節跋 版元：出雲寺松栢堂	明暦3年（1657）版	高岡市万葉歴史館
絵画	「陸奥ノ國の黄金を賀し奉れる歌」「一」～「三」（〈萬葉集畫撰〉第六十三圖～第六十五圖）	大亦観風	昭和15年（1940）	奈良県立万葉文化館
書籍・典籍	寛永二十年版『万葉集』	版元：安田十兵衛	寛永20年（1643）版	当館
パネル（図）	「恭仁宮復元図」	木津川市教育委員会	現代	画像提供：木津川市教育委員会
考古資料	恭仁宮跡出土　大極殿軒瓦	—	奈良時代（8世紀前半）	京都府立山城郷土資料館
考古資料	恭仁宮跡出土　文字瓦　5点	—	奈良時代（8世紀前半）	京都府立山城郷土資料館
パネル（写真）	「安積親王墓（和束墓）」	—	—	画像提供：和束町役場

□第2部　国司として―新たな風土への驚きと民に接するよろこび

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
書籍・典籍	寛政十二年版『令義解』	版元：山城屋佐兵衛	寛政12年（1800）版	富山市立図書館
工芸品	古代の文房具セット［複製］	富山県埋蔵文化財センター	現代	富山県埋蔵文化財センター
考古資料	越中国府関連遺跡出土　円面硯2点	—	奈良時代	高岡市教育委員会
考古資料	中保B遺跡出土　烏油製腰帯具（巡方）	—	奈良・平安時代	高岡市教育委員会
考古資料	中保B遺跡出土　石製腰帯具（巡方）	—	平安時代	高岡市教育委員会
工芸品	石帯［模造］	斎宮歴史博物館	現代	斎宮歴史博物館
工芸品	国司の衣服（朝服）［復元］	高岡市万葉歴史館	現代	高岡市万葉歴史館
考古資料	伊勢国府跡出土　三重圏文軒丸瓦	—	奈良時代	鈴鹿市考古博物館
考古資料	伊勢国府跡出土　重廓文軒平瓦	—	奈良時代	鈴鹿市考古博物館
考古資料	伊勢国府跡出土　鬼面文鬼瓦	—	奈良時代	鈴鹿市考古博物館
考古資料	伊勢国府跡出土　須恵器・坏蓋ほか3点	—	奈良時代	鈴鹿市考古博物館
考古資料	伊勢国府跡出土　押印文字瓦3点	—	奈良時代	鈴鹿市考古博物館
古文書	平城宮跡出土　木簡「越中国羽咋郡中男作物鯖壱伯隻」	—	天平18年（746） 重要文化財	奈良文化財研究所
古文書	平城宮跡出土　木簡「越中国羽□□都知郷」	—	奈良時代	奈良文化財研究所
古文書	平城宮跡出土　木簡「鵜甘部郡穂郡越中国讃岐国」	—	奈良時代	奈良文化財研究所
パネル（写真）	正倉院宝物「但馬国天平九年正税帳断簡」	—	原品：天平9年（737）	写真提供：正倉院事務所
書籍・典籍	「江州石山寺蔵本写　越中国官倉納穀交替記　全」	—	—	高岡市万葉歴史館
古文書	北高木遺跡出土　出挙木簡・種子札木簡	—	奈良時代	富山県埋蔵文化財センター
パネル（写真）	「天平宝字三年越中国礪波郡石粟村官施入田地図」	撮影：佐々木香輔	原品：天平宝字3年（759） 重要文化財	画像提供：奈良国立博物館
考古資料	高瀬遺跡出土　墨書土器　4点	—	奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀初頭）	南砺市埋蔵文化財センター
考古資料	高瀬遺跡出土　坏蓋硯	—	平安時代	南砺市埋蔵文化財センター
考古資料	高瀬遺跡出土　木簡「昔右支□易□上人□□」	—	平安時代（9世紀前半）	南砺市埋蔵文化財センター

□第3部　武門の人として―官人としての苦悩

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
考古資料	高瀬遺跡出土　銅銭　4点	—	奈良・平安時代	南砺市埋蔵文化財センター
考古資料	高瀬神社西遺跡出土　円面硯	—	平安時代	南砺市埋蔵文化財センター
書籍・典籍	『訂正古訓古事記』上巻・中巻	本居宣長訓・長瀬真幸校 版元：河南儀兵衛ほか	享和3年（1803）版	高岡市万葉歴史館
書籍・典籍	『前賢故実』	菊池武保（容斎） 出版：郁文舎	明治36年（1903）版	当館
書籍・典籍	寛文九年版『日本書紀』	版元：八尾甚四郎友春	寛文9年（1669）版	高岡市万葉歴史館
絵画	「相模の國の防人の歌」（〈萬葉集畫撰〉第六十九圖）	大亦観風	昭和15年（1940）	奈良県立万葉文化館
絵画	「勇士の名を慕ふ歌」（〈萬葉集畫撰〉第六十六圖）	大亦観風	昭和15年（1940）	奈良県立万葉文化館
絵画	「下野の國の防人の歌」（〈萬葉集畫撰〉第七十圖）	大亦観風	昭和15年（1940）	奈良県立万葉文化館
パネル（写真）	正倉院宝物「駿河国天平十年正税帳断簡」	—	原品：天平10年（738）	写真提供：正倉院事務所
書籍・典籍	『日本霊異記』中巻（『群書類従』巻四四七中・雑部）	—	—	富山市立図書館
考古資料	大宰府政庁周辺官衙跡出土　墨書土器「大城」	—	奈良時代（8世紀前半）	九州歴史資料館
考古資料	水城跡出土　墨書土器「水城」［複製］	太宰府市教育委員会	現代	太宰府市教育委員会
古文書	大宰府政庁周辺官衙跡出土　木簡「御笠団」	—	奈良時代（8世紀）	九州歴史資料館
古文書	大宰府政庁周辺官衙跡出土　木簡「兵士合五十九人」	—	奈良時代（8世紀）	九州歴史資料館
古文書	大宰府政庁周辺官衙跡出土　木簡「三団兵士」	—	奈良時代（8世紀）	九州歴史資料館
工芸品	御笠団印［複製］・遠賀団印［複製］	九州歴史資料館	現代	九州歴史資料館

種別	資料（作品）名	作者	年代・指定	所蔵
考古資料	多賀城跡出土　直刀・丸木弓・鉄鏃	—	平安時代（9世紀後半）	宮城県多賀城跡調査研究所
考古資料	多賀城跡出土　政庁Ⅲ期軒瓦	—	奈良時代末期～平安時代	宮城県多賀城跡調査研究所
考古資料	多賀城跡出土　政庁Ⅳ期鬼面文鬼瓦	—	平安時代	宮城県多賀城跡調査研究所
パネル（写真）	「軍団兵士人形」	—	—	画像提供：福島県文化財センター白河館
古文書	多賀城跡出土　木簡「白河団進上」	—	奈良時代末期～平安時代前期 宮城県指定文化財	宮城県多賀城跡調査研究所
古文書	多賀城跡出土　木簡「兵士五百七十」	—	奈良時代（8世紀前半） 宮城県指定文化財	宮城県多賀城跡調査研究所
古文書	多賀城跡出土　木簡「安積団解」	—	平安時代（9世紀～10世紀前半） 宮城県指定文化財	宮城県多賀城跡調査研究所

平成28年度 高志の国文学館 紀要 第2号

平成30年2月15日発行

編　集　高志の国文学館
富山県富山市舟橋南町2－22
TEL076－431－5492

印　刷　北日本印刷株式会社

発　行　高志の国文学館

※許可なく転載、複製することを禁じます。